
深淵を引き裂く運命の剣

naka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深淵を引き裂く運命の剣

【Nコード】

N1395Y

【作者名】

naka

【あらすじ】

退屈な毎日を送っていたルークは天空から落ちてきた剣を手にする。そのとき、彼は第7音素の光に導かれ、そこで栗色の髪の娘と赤い騎士に出会う。

TOAとFATEのクロスオーバーです。捏造設定、改変などが含まれています。

そのようなものが苦手な方は避けられたほうが無難です。

どちらかというと、かなりシリアスな方向に行くと思いますので、

ご注意ください。また、ティアの設定が多大に変更されています。

タイトルとあらすじを変更しました。(以前のタイトル「TOA

×FATE(仮)「」)

序章

月が出ていた。

月の光が深淵を覗くように深い闇を照らし、荒れた大地に咲く白い花々が、震えるようにその身を揺らしている。

すべてに背を向けるようにして、崖の向こうに広がる海を臨み、遠く聞こえる潮騒を観客に、女性の透明な歌声が響く。

いにしへの約束はひとつの始まりと終わりを彩り、新しい約束を生んだ。

その歌は始まりと終わりを結んで、また新しい始まりとなる。この始まりを知る者は無く、新しい悲劇の幕開けとなるだろう。

やがて音も無く人影が姿を現し、彼女を伴って闇の向こうへと姿を消した。

月は今日も夜の闇を見ている。

第一章 焰と弓と歌姫と

燦々と輝く月光も木々の陰影に切り刻まれて、足元を照らすのは小さなカンテラと、地面に深く刻まれてた召喚陣の仄暗い光。虫の声も静まり絶え、かすかに吹き付ける風が木々の葉をざわめかせている。

そんな中で、一人の女性が長い髪をなびかせ、召喚陣の前で高々と詠唱を続けている。

乱れ飛ぶ音素を拾い、すり合わせ従わせる。

内に宿る異なる系譜の力を合わせ、混ぜて己に取り込む。

己の身体を一つの楽器として、魔力を糧に音楽を奏でるのだ。

この世ならざる地へとつながる何重もの扉を抉じ開け、己を引き裂く重圧に耐えて、わずかにできた繋がりを辛うじて保つ。

「 告げる。 」

すでに外と内との境界はない。

召喚陣からは嵐が逆巻き雷光が輝く。

「 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。 」

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ 「

巻き上がる光に導かれるように、滔々と歌い上げる。

「 誓いを此処に。 」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

！」

そして、召喚の紋様が燦然と輝き、光の暴風が吹き荒れて世界は白く塗りつぶされた。

そして。

「問おう。君が私のマスターか。」

光と風の嵐が収まったとき、一人の騎士がそこに姿をみせた。

真っ白な髪と浅黒い肌、鋼のような鍛えられた身体に黒い鎧に赤い外套を羽織って、射抜くかのような観察するような眼でこちらを見つめている。

魔力の残り香が漂うその薄暗い森の中で彼女は彼と相対した。

怖気づく心を無理やりに押さえつけ、その鋼色の瞳を強く睨みつけ彼女は口を開いた。

「ええ、そうよ。私があなたのマスター」

そう言って女は薄紅色の手袋を脱いで、その契約の徴たる令呪をかざした。

彼はそれを見て皮肉げに顔をゆがめると身をただし宣誓の言葉を続ける。

「サーヴァントアーチャー、召喚に従い参上した。

これより我が弓は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。

ここに、契約は・・・」

カラン

乾いた音と共に再び光の渦が巻き上がり、轟音を共に結界と魔方阵は粉々に打ち砕かれた。

サーヴァントはすばやく女を抱きかかえ、飛びのいてその先にあるものに向け剣をかざして警戒を強めた。

舞い上がる土ぼこりの向こうに、何かがいるのを確認して誰何の声を上げる。

「何者だ」

無音。

彼らはさらに警戒を深めて見てみると、土煙は晴れぼろぼろになった召喚陣の成れの果ての上に、長い髪の青年が倒れていた。

「へ？」

恐る恐る近づいて見れば、気絶したまま目を覚ます様子はない。それでもそのままにするわけにも行かず、どうしたものかと困惑

した様子で己の呼び出したサーヴァントを見た。

今日もまた代わり映えのしない一日であるはずだった。

キムラスカ王国・ファブレ公爵家の一人息子、ルーク・フォン・ファブレは第3位の王位継承権を持ち、いずれは国王となることも十分にありえる身の上であった。しかし、7年前の10歳の頃に敵国マルクトに誘拐され、その精神的ストレスを理由にすべての記憶を失ったという事で、それ以降は屋敷内に軟禁されて育った。

身の安全を図るためという理由であったが、ルークにとってそんなことはどうでもよくて、速く外に出たいと目が覚めるたび眠るたびに思っていた。

外の世界がどれほど冷たく厳しいものであるのか、そんなことを想像することもなく、停滞した小さな世界の中でまどろむような日々を過ごしていた。

その時までには。

その日はとても天気がよくて、青空に譜石帯がきらきらときらめいているのがよく見えていた。

ルークは屋敷からこっそりと抜け出して、裏庭に続く森の木の上に座って屋敷を眺めていた。どれだけ眺めていたって何が起きるでもなく、だからといってあきらめきれず、もやもやした苛立ちをどうしようもできなくて、

「代わり映えしねえーな」

そう吐き捨てて、ため息をついたとき、下の方から聞きなれた声が聞こえた気がして振り向いた。

「やっぱりここか」

そこには幼馴染でもある使用人のガイが苦笑を浮かべて見ていた。

「ルーク、おまえが勝手に部屋を抜け出したら騒ぎになるって言うたろ」

「なんでここが」

驚いた顔でそう言うと「何年お前の世話をしてると思ってる」と笑った。

「ご主人様の行きそうなところぐらいわかるぞ。使用人の鑑だろ？」

そうガイが茶化すようにウィンクすると、ルークは枝から立ち上がり身を乗り出すようにして、

「おれはガイのことただの使用人だなんて思ってたない！」

少し泣きそうな目でガイに向かって叫んだ。

この金髪と青い瞳の男はいつもそうだ。屋敷の人間に遠慮してそうやって線を引いて、そういう態度がどれだけいやな気分させるかわかってくれない。

身分だとか血筋だとかそんな俺は知らない。

幼馴染で親友。それでいいじゃないか。

「ガイはすつと視線をはずすと、「そうだな」と口をゆがめて笑った。

僅かに苦しげな表情を浮かべているのをルークは気にも留めない。せいぜい、口うるさい執事に文句を言われるかもしれないことが、気にかかるだけだろうとそんな楽観的な感想しかなかった。

自分の意見が多少なりとも受け入れられたと思ったルークは少し機嫌をなおして、それでも機嫌の悪い顔をして偉そうにふんぞり返った。

「それでなんのようだ？」

改めてルークが尋ねると、ガイはそういえばといった顔をした。

「ガイ、ルークは見つかりました？」

向こうの方から若い女性の声が聞こえてきて、ガイは振り返って手を振った。

ちよつと畏まった態度をして笑顔を浮かべ、ルークの方を指差す。

「ええ、ナタリア姫。あそこに」

「あ、ば、ばか。教えるなよ」

ルークはわたわたしながらガイに抗議の声を上げる。

その女性、ナタリアはむっとした表情を浮かべ手を腰に当てていた。

いつものようにルークの礼儀知らずな態度にあきれつつも、だからこそしっかり言ってあげなくてはという使命感で朗々とした声を

上げた。

「ルーク、そんなところで何をなさってるの」

その言葉にむっとしたルークは子どもっぽい表情で怒りだした。

「俺が何をしようとか俺の勝手だろ！」

どうせこの屋敷から出られないんだ」

腕を組んでつーんと顔をそらして、17歳とは思えないような幼い態度でそんなことを言う。

ガイはそれを見て、やれやれといった顔で苦笑した。

わがままには慣れてるが、ホントにしかたない奴だな。

仮にも婚約者なのだからもう少し優しくしてやってもいいのに。そんなことをガイは心の中でつぶやいた。

ナタリアにとっても、ルークのそんな態度は慣れたものだったが、やはり気分のいいものではない。だが、彼の境遇を思えば哀れまらずにはいられない。

昔の彼を思えば今の彼はまったく別人だが、いつかあの約束を思い出して昔のように頑張っていける。彼との約束のためにもっと頑張らなければと心に誓うのだった。

ルークは跳ねるように木から飛び降りると、二人のすぐそばによつてきて相変わらず偉そうな態度をしてふんぞりかえった。

「それより！ おまえこそ何しに来たんだよ」

「ルーク、それが婚約者に対する「おい！あれなんだ??」

ナタリアの苦言を遮って、ルークが驚きの声をあげ走り出した。誰が想像できるだろうか。

空の彼方から、きらめく光が落ちてくるのをガイとナタリアは呆然として見つめるしかなかった。

そのまま止まることなく地上に落ちて、三人が立っている少し離れた場所に突き刺さり、それが一振りの剣であることを気づかされた。

「おい、ルークちょっとまで。危ないぞ」

はっとして、ガイが制止の声を上げるが止まるはずも無い。

刺激の少ない退屈な生活をしているルークにとっては、危険であるうと止まる理由にならないのだ。

跳ねるようにすぐそばに走りより、周りを回ったり屈んでその剣の姿を観察していた。

「こりやいったなんのことだ？」

「マルクトの新しい譜業か何かでしょうか。」

ルーク、離れた方がよろしいのではなくて??」

二人のいさめる言葉も耳に入らず、ルークは剣に釘付けだった。

その剣は今まで見た剣の中でもとびつきり変わっていた。

鍔が音叉のような形をしており、中心に金色の宝玉、刃はまるでひびが入っているようなデザインがなされていた。

「すんげー」

ルークは目をきらきらさせて、今までに無いわくわくに胸を躍ら

せていた。

と、そんなルークにいつも彼を悩ませている激しい頭痛が生じた。それはいつも幻聴を伴っており、そのときもまた同じように聞こえてきた。

いつもなら、ただの厄介な頭痛というだけで少し休んでしまえば問題がないものであったが、そのときはタイミングが不味かった。激しい頭痛に体勢を崩し、あわててその剣の柄をつかんで身体を支えたとき、激しい光と音が生じ、ルークを巻き込んで爆風と共に光は彼方に飛び去っていった。

暖かい。

優しく暖かな光が目の前を横切り、すっと消えてしまうと身体が楽になる感覚がした。木々のざわめきと共に誰かが話している声が聞こえ、いったいどういうことだろうとルークは思った。

目を開けると周りは薄暗く、木々の間から漏れる月の光がちらちらと輝いているのがわかった。

目の前では、髪の高い女性と騎士風の男性が深刻な顔で何かを話している。

「共鳴現象？」

「ええ、第七音素同士が干渉しあって擬似超振動が発生したんだと思うわ。」

この剣、おかしいくらい第七音素が詰まっている。

なんでこんなことが・・・、あら目を覚ましたみたい」

女性ははつと気づくとルークのそばに駆け寄って、屈んで顔を近づけ心配げに青い瞳を細めた。

「だいじょぶ？ 痛いところないかしら。変なところがあるなら早めに言っただいね。一応、一通り確認したんだけど」

「あ、ああ。って、あんた誰？

つか、ガイとナタリアは？

屋敷の連中は何やってんだよ。

寝かしたままにしておくとか信じらんねー」

「えーっと。落ち着いて聞いてね。

ここは・・・マスター敵襲だ！」嘘！大変！！」

これ持つてと言って剣をルークに押し付けたあと、女性は立ち上がりダガーを構えた。

がさつと草むらが揺れたと思った瞬間、まがましい目をした魔物が飛び出してきた。女性はそれに向かい走り出す。

その間にも赤い騎士が魔物を次々と仕留めていく。

二本の剣を構えて踊るように剣を振るい、魔物は引き裂かれ血が吹き出て地に落ちていく。

「何で魔物が・・・」

状況がさっぱり理解できなくて、ルークは呆然として立ち尽くしていた。

あまりの状況の変化に対応できず、その後ろから魔物が隙をうかがってることに気がつかなかった。

辛うじて立ち上がり剣を握っているのが精一杯で、これからどう

すればいいのかと彼らの立ち回りをうかがうのがやっとだった。

魔物達はそんな彼の心情など気にも留めず、うなり声を上げて後ろから飛びかかってきた。

「後ろ！！」

その警告にあわてて振り向くと、牙を剥き出しにした魔物達が押し寄せてくる。

ルークは剣を握り直して、魔物を見てみつともなく剣を振るった。うまく通らない剣に苛立ち、舌打ちをして後ろにいったん下がり体勢を立て直すと女性が歌を歌いだした

魔物の動きが鈍ったのを見てチャンスと思ったルークは、魔物に飛び掛り渾身の力を込めて剣を振るった。

感じたことの無い生々しい恐怖に怯えつつも、心を奮い立たせて襲いかかる魔物たちに立ち向かっていく。

一太刀一太刀に感じる死と言う現象に、言いよつの無い恐れを抱きながら。

そして1匹、2匹と押し寄せてくる魔物らを切り伏せ、これなら何とかかなりそうだと思ったとき。

カシャン

軽い破壊音を立てて剣が碎け散った。

「嘘だろ！」

あわててバックステップを踏んで、後方に下がったとき女性が前に立って魔物を打ち倒してこちらを振り向くと、あわてた表情で「

「こつちよ！」といってルークの手を引いて走り出した。

後ろから魔物が次々と襲いかかろうと、彼らに向かって殺到していくのを赤い騎士が立ちふさがり切り伏せていく。

そして、森を抜け広く見通しのよい場所にたどり着いたとき、あまりの美しさに目を奪われた。

淡く輝く白い花が一面に咲き誇り、両脇に立つ崖の間に丸い月が顔を出して、その向こう側には驚くほど大きな水の鏡が月光に照らされてほのかに光っていた。

思わず言葉を失って、まるで時が止まってしまったような気がした。

「アーチャー、やって！」

「了解した」

振り向くと赤い騎士が目の前に立って弓を構えていた。

何かをつぶやいたと思ったとき、強烈な爆風が吹き荒れて、押し寄せてきていた魔物達は消え去っていた。

その後にはなぎ倒された木々と抉れた岩と土が残されて、その威力のすさまじさを物語っていた。

「さて」

女性は唾然としているルークを見て、髪を掻き揚げて苦笑すると、

「私の名はティア。あなたの名前は？」

そう言って、また深く微笑んだ。

第二章 タタル溪谷にて

木々のざわめきがことさらに夜の静けさを演出して、薄く輝く白い花の美しさをさらに際立たせているようだった。

そんな場所で彼女、ティアは地面に手をついてうなだれていた。

「ルーク・フォン・ファブレ・・・、貴族、しかもあのキムラスカの・・・。」

その隣でルークは不機嫌そうな顔をしていた。

激しい戦闘が一段落して、名前を覚えてくれて聞いてきたから名乗ったのになんだよこの態度は。なんか衝撃を受けたような顔をして倒れるようにしゃがみ込んだと思ったら、この通り、人を無視してなんかぶつぶつ言ってるし。

「ごたごたしたのが終わって、やっと何がどうなってるのか教えてもらえると思ったのに、これじゃあ振り出しじゃないか、役に立たない奴だなとそんなことを考えてた。」

額にしわを寄せて見ていたが、ふと不安になってきた。

彼女も屋敷の人間みたいに変な態度をとるんだろうか？

身分とか言うやつか？そんなの関係ないのに。

不安に任せてルークはティアに荒々しく声をかけた。

「おい、いつまでそんなことやってるんだよ。」

それよりここどこだ？

ガイとナタリアは？

何でモンスターがいるんだ？

なあ、ここどこなんだ??」

そんなルークの声を無視して、しばらくぶつぶつ言っていたが、突然むくつと立ち上がって、

「ま、いいか。」

釣り上げたら海老と一緒にマグロと鯛がついてきたようなものだわ。

何事も前向きに行かなきゃ、前向きに」

こくこくと頷いて、晴れ晴れとした笑顔でどこかポイントのずれたことを言っていた。そして、後ろに立っていた赤い騎士は「私は海老なのか・・・」と少し傷ついた表情でぼやいていた。

「ああ、ごめんなさい。ここはタタル溪谷よ。」

あなた、超振動、擬似超振動だったかしら?でここまで飛ばされてきたみたいね。いきなり上から召喚陣に降ってきたからびっくりしちゃったわ。しかも、結界もなにも崩壊させちゃっし。

第七音譜術士同士でさえめつたに起こらないっていうのに、いったいどういうことかしら」

ティアは何事も無かったかのように、ルークに解説を始めたが、知らない単語ばかりでよけいに混乱が増すばかりだった。

「はあ? なんでタタル溪谷??」

それにちよーしんどー? なんだそりゃ?」

「さあ、なんでかしら??」

それから、超振動ってというのは同一の音素振動数を持つ音素同士が干渉し合うことで起こる、ありとあらゆる物質を分解し再構築す

る現象よ」

「だー、わけわかんねー。

俺を屋敷にかえせよ!」

「いきなりかえせって言われても・・・」

ティアは困惑に言葉を詰まらせたが、その様さえもルークにとっては苛立ちの種にしかない。

と、そんな二人を揶揄するように嫌みったらしい言葉が振ってきた。

「やれやれ、何だと聞いておいてその有様か。この世界の貴族様は1から10まで説明してもらうどころか、1の説明に100の説明が必要なようだな。

これならまだ幼い子どものほうがまだ可愛げがあって付き合いやすい」

「なんだと!？」

「それとも何かね？」

よしよし可哀想だねとでも言っしてほしいのかね?」

「っ、てめー。何だよ、違っに決まってるだろうが!」

「はいはい、喧嘩はだめ。

アーチャーも挑発するようなこと言わないでよ」

ティアの諫めるような言葉に赤い騎士、アーチャーはフンツと鼻で笑ってそっぽを向いた。

その様子にルークはさらに腹を立てて、向かっていこうとしたがティアが呆れた顔をして割って入った。

「ほらほら、落ち着いて。ね？」

あんまり大きな声を出してたら魔物がまたよって来るわよ」

「っ、魔物？」

引きつった顔であちこちを確認するルークに苦笑して、

「ここは見通しがいいし、さっきのこともあるからすぐに来ることは無いわ」

安心させるようにそう言った。

「はあ、なんだよ。驚かせやがって」

そうため息を吐くルークにティアは思わずといった表情でくすくすと笑った。

それからすぐに真剣な表情をして青い瞳をまっすぐに向けて言った。

「安心して、必ずあなたを無事に屋敷に送り届けてあげる」

そんな彼女の真剣な表情にうろたえて、明後日のほうをむいて

「あ、あたりまえだろ」

と、彼は弱々しげに呟いた。

遠くに見える海には月の光がさして、光の帯が波に揺れ滲んでい
る。

ここ一面に咲く花はつつましげに身を震わせて、絵画のようなそ
の光景に寂しげな色をつけている。

想像もつかなかったような美しい光景に、思わず目を奪われて、
ルークは文句を言うのも忘れてそのまま遠くを見ていた。

ティアはそれを横目にちやきちやきと野営の準備を始めていた。

「今日はもう、ここで休みましょう。」

もう、夜も遅いし森を抜けるのは危険だわ」

「ええー、こんな土の上で寝るのかよ。」

毛布もベットもないのにどうやって寝ればいいんだ？

もー、信じらんねー」

苛立ちもあらわに吐き捨て、「こんなところにいられるかよ！」と
森に向かってずんずんと歩き出した。

「ルーク」

今までに無い強い語調に思わず振り向くと、ティアはついつと手
を振り下げて一言を唱えた。

「Gute Nacht」

おやすみなねー

何だろつと思つ暇も無く、彼は強い眠りに引き込まれそのまま地
面に倒れこんでしまった。

「はあ、つつかれたー」

ティアはせいせいしたといった表情で座り込んだ。

ルークの前では平気な顔をしていたが、実際には限界でどうしようもなく眩暈がして倒れそうだった。召喚に加えて突然の魔物の襲来で、体力も何もかも底をついてしまつて、もうすでに気力だけで動いてるようなものだったのだ。

それを傍観していたアーチャーは、やれやれといった呆れた表情を浮かべていた。いつの間にも集めたのか、野営に必要な薪を抱えてきてテキパキと焚き火の準備を始めている。

「マスター、ずいぶんと安請け合いしたようだが本気か？」

「本気よ」

「そんな面倒なことをせずとも、「アーチャー、これは決定事項よ」やれやれお優しいことで。これは先が思いやられるな」

「アーチャー」

「これは失礼、なにせ来て早々に戦闘で満足に話もできず、それが終わったと思えばマスターはお子様の相手にかかりつきりで、何のために召喚されたのか心配になつてね」

ティアは綻ぶように微笑んで首をかしげた。

「あら、拗ねちゃつたのかしら？」

「いや、別に」

「ふふっ」

「そんなことより、マスター」

アーチャーはコホンと咳をして、仕切りなおすように表情を引き締めた。

「さつきは余計な邪魔が入って、大切なことを聞き忘れていたが、マスターの名前は？ 私はマスターをなんて呼べばいい？」

不意を突かれたように驚いた顔をしていたが、すっと顔を背けて黙り込んでしまった。

不審に思ったアーチャーが言葉をかけようとしたとき、強い意志を瞳に宿してはつきりとした語調で彼の問いに答えた。

「ティアよ。ティアって呼んで」

そう言ってふっと表情を緩めた。

「オールドドラントにようこそ、異世界の英雄」

遠くから微かに鳥の鳴き声が聞こえる。

「ルーク、ルーク！ 起きて、起きてったら！」

ルークは小さくうなり声を上げて寝返りを打ち寝ぼけた声で

「うるさいなあ。いいだろ別に、もう少し寝かせてくれー」

「起きてっつてば、ねえ」

「ううー、うっせー！」

ガバツと起き上がり苛立たしげに叫んだ。

「何だよ。うるさ・・あ？」

「ここどこだ？え？あれ？？」

日の光に目を眇めながら、ぼんやりあたりを見渡した。
それをティアとアーチャーは呆れた様子で見ている。

「おはようルーク、もう朝よ。

さっさと起きて準備して、早く出発しないとまた森の中で野宿する羽目になるわよ」

「あれ？森？」

えっと、裏庭でだべってて、剣を見つけてそれで・・・」

「まだ寝ぼけてるの？」

「ここはタタル溪谷、忘れたの？」

話してたら急に寝ちゃうんだから焦ったわ」

つらつと私は何も知りませんといった顔で話すティアに、アーチャーは顔を背けてにやける顔を押さえていた。

「それよりほら、寝癖。

「ご飯ができてるから食べましょ」

その言葉にルークはしぶしぶ身を起こし、背伸びして大きなあくびをした。

いい天気だ。雲ひとつ無く、青い空が広がっている。

いつもならもう一眠りできるのにと思いつつ、促されるままにすでに調理された料理の前に座った。

シンプルなスープと軽くあぶったパン、あと少量のピクルス。

今いるところを思えば十分なものであったのだが、贅沢な食事で育ったルークにとっては衝撃だった。

目を点にして料理とティアの顔を見比べている。

「どうしたの？早く食べないとスープが冷めるわよ」

「これだけ？」

「わがまま言わないで、今はこれで精一杯なんだから。

旅の途中で豪勢な料理なんてできるはずないじゃない」

「はあ？信じらんねー。だっせーな」

「はいはい、わかったから早く食べてね」

めんどくさげに軽い感じで追い立てられて、ムツとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「あ、うまい」

スープを一口飲んでぼそっとつぶやく。

ルークは育ちのよさが滲み出る優雅な手つきで次々と料理を口の

中に放り込んでいった。

それを確認するとティアも料理に手を伸ばした。

しばし彼らは無言で食事に専念していた。

と、ルークがアーチャーの方を見て、眉をひそめた。

「なあ」

「ん？なんだね？」

目をつぶって立っていたアーチャーはルークのほうを流し見て首を傾げる。

「あんたはご飯食べねーのか？」

「いや、私は「そういえば、サーヴァントって食事必要なの？」、「マスター」

アーチャーは眉をひそめてティアの方を見た。

「かまわないわ。どっちなの？」

じつとティアの方を見つめたが、根負けしたようにため息を吐いて軽く首を振った。

「食べられないことはないが基本的にサーヴァントに食事は不要だ。十分な魔力供給があれば空腹を感じることも無い」

「そう・・・なら食べる？」

「いや、結構だ。ただでさえ少ない食料を減らす必要は無い。
私なんかのために振り分けるより、その食べ盛りの子どもにた
くさん食べさせるといい」

「子どもって俺のことかよ！

ちよつと背が高いからっていい気になりやがって！」

「まあまあ、いいじゃない。小さくたって」

「よくなー！！」

「あ、おかわりいる？」

「・・・いる」

そう言っつてそつとティアに食器を差し出した。

なんとなく手玉に乘せられたような気がして、ルークはそこはか
とない敗北感にがつくりとした。

それでも、料理はとても美味しかった。

第三章 道中にて

「ごちそうさまー。」

ま、まあ、見た目の割にはまあまあ美味かったよ」

相変わらずルークは偉そうにふんぞり返ってそう言った。

それを聞いたアーチャーは嫌味ったらしい笑みを浮かべ

「それはそれは、こんな貧しい食事でも満足していただけたようで恐縮至極。」

腕を振るった甲斐があるっていうものだ」

「はあ？何だよその言い方。ムカつくやつだな。
だいたいなんだよそれ、偉そうに」

「もう、喧嘩しないの。」

・・・アーチャーごちそうさま。

いきなり自分が料理するって言うからどうなるかと思ったけど、
すごくおいしかったわ。・・・まあ、ホントは私が作りたかったん
だけど」

「ティア、朝からあんなものを作るうっていうのは間違ってると思
うぞ」

「いいじゃない、朝からたい焼きだって」

「いいや、朝はバランスの良い食事を取らないと身体に悪い。」

甘いものだけの食事など認めん」

「えー」

「は？ティアが作ったんじゃないの？
ていうか、たい焼きってなんだ？」

「豆で作った甘いペーストをかりっとした生地で包んだお菓子よ。
あんこはわざわざ手作りをしたんだから」

ティアは片付ける手を止めて、大きな胸をむんつと張ってそんなことを言った。

「ティア、食器はこちらに。
食後のお茶でもどうかね？」

アーチャーは何事もなかったかのように、ティアにお茶を勧めた。

「もらうわ。ルークも飲むでしょ？」

ティアもその言葉にうなずいて、ルークに尋ねた。
ちらちら彼女の胸を見てたルークはあわあわして、目を彷徨わせたあとに慌てて首を縦に振ってうなずいた。

「あ、ああ。飲む飲む！」

「あれ、このコップってどこから？
さっきの食器もそうだけど、どこにしまいこんでたの？」

そんなルークに気づくこともなく、彼女はついさっきから抱いていた疑問を自分の従者に投げかけた。

「なに、ちょっとした手品や」

そんなことを言いつつ、彼はどことなく気品さえ感じる優雅な手つきで手早く、ついつつとお茶を注ぎ込む。

「ふーん」

和やかな空気が流れる。

「っだー、そもそも！

お前誰だよ！

それに昨日のあれ！あれっていったいなんだ！？」

ルークはハツとしたようにコップから顔を上げて、自分の疑問を穏やかな空間に叩きつけた。

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括ったような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄ろうとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「彼はアーチャー、弓の騎士のクラスのサーヴァントよ」

「あん？ そのサーヴァントってなんだ？」

「えっと、サーヴァ」そこまで説明する必要はあるまい、日が暮れてしまうぞ。逐一説明していたらいつまでたっても出発できまい」

むー。またそんな言い方して」

「くー、むっかつやつだな！」

「じゃあ、そろそろ出発しましょうか。」

できれば日が暮れる前に森を抜けてしまいたいし」

ルークの怒り声を軽く聞き流して、ティアはそう言うのと残りを片付けて、荷物に入ったバックを持って森の中に歩き出した。

「あ、おい」

一瞬唖然としたあと、ルークもあわててその後ろをついて歩き出した。

ティアは入り組んだ山道を迷いなく、時々周りを警戒しつつ慎重に道を選んで進んでいった。ティアに続くルークの後ろにはアーチャーが続き、後方の警戒に当たっていた。

どれほど警戒してもやはり魔物の襲撃を逃れることはできず、その度にルークはみっともなく驚きながらも対応に当たることになった。

どうして自分がとルークは思わなくもないのだが、何故か必ずといつていいほどルークのほうに魔物が飛び掛ってきて、剣を振るわざるを得ない状況になっている。その度にやれ脇が甘いだの、やれ良く見てタイミングを合わせるだのと赤い騎士からの嫌みったらしい助言が飛んできた。腹は立つのだが妙に的確な助言なので文句も言えず、ただただイライラが募るばかりだった。

「つこの！『双牙斬』」

飛び掛ってきた魔物を軽く避けて、力を込めて剣を振り下ろし、その勢いを借りて飛び上がり切り裂いた。

切り裂かれて血まみれになった魔物の姿に思わず立ちすくんだとき、その隙を突くかのように横から別の魔物が飛び掛ってきた。

「つく」

引きつった顔をして剣を構えようとしたとき、後ろから剣が放たれてまっすぐに魔物の額に突き刺さった。

「戦闘中に気を緩めるなといったはずだが」

すぐ横を赤い影が通り過ぎ、魔物に突き刺さった剣を抜き取ると一瞬のうちに残りの敵を切り捨てていく。

そして注意深く周りを見渡したあと、振り向きもせずティアのすぐそばに歩いていった。

「ティア、怪我はないか」

「え、ええ。特に問題ないわ。ルークは？」

ティアは乱れた服を直しつつそう答えて、ルークのほうを見やっ

た。
「あ、ああ。こんなの俺様にかかれたいしたことないって」

思わずといった風にルークはそう答えた。

実際のところは、慣れない実践でミスを連発していたが、それを

おくびにも出さずに見栄を張っていた。

彼女はそれに気づかないふりをして微笑んで、ふと立ち止まって見てルークのそばに駆け寄った。

「そこちよつと怪我してるじゃない！」

ルークはその剣幕に驚いてのけぞったが、それさえも気にせず彼のすぐそばに立ち止まると左腕をつかんで手をかざした。ぼそつと何かをつぶやくと仄かな光が傷口のあたりに広がり、見る見るうちに傷が消えていった。

それを目を大きくして見ていると、また、アーチャーが苦言を溢した。

「過保護なことだ。わざわざ魔術で癒すほどのことでも「譜術よ」何？

だがしかしそれは・・・「譜術」、了解した。譜術だな」

言葉を遮って、強く告げた言葉にしばし困惑した目をしていたが、納得したという風に頷いた。

「っだー。どっちでもいいから早く離せ！」

その声にティアは掴んでいた腕を慌てて離して飛びのいた。

そして、「コホンと咳をして何事もなかったかのように繕って、

「じゃ、じゃあ行きましようか」

とそつ言って歩き出した。

それからしばらく歩いて、やっと森から抜け出した。
ルークは大きく伸びをしてせいせいしたといった感じで

「やっと抜けたー」

と叫んだ。

「ったく、木はうぜーし邪魔だし土はぬかるんで滑るしもーやだ。
早く帰って屋敷のベットで2度寝したいぜ」

そう言っつて、後ろを振り向くとアーチャーがティアも付き添うようにして彼女のそばに立っていた。支えようと手を差し伸べる彼に、彼女は嫌々するように身をよじって拒んでいた。

「だから、まだ大丈夫だつてば」

「いや、しかしだな」

振り払う手は弱々しく、ついにはバランスを崩し倒れそうになった。

それを素早く支えて「だから言ったのだ」などといいながら、そつと木陰の下に座らせた。

「悪いがマスターを見ていてくれないか。向こうで水を汲んでくる」

「あ、ああ」

剣幕に押され思わず頷いたルークを横目に素早く走り出した。

「お、おい、どうしたんだ？」

おずおずとルークはティアに尋ねた。

さっきまでぴんぴんしていたのにどうしたんだらうか。あんなに散々引つ張りまわしていたのに。屋敷まで送ってやるって自信満々に言っていた癖に、こんな調子で大丈夫だらうか。

そんな考えが自分本位なものであるなど気づくわけもなく、少々不機嫌なそれでいて不安げな表情を浮かべている。

「ん。だいじょーぶ。あ、ありがとー」

いつの間に戻ってきたのやら、アーチャーが濡れた手ぬぐいをティアに差し出している。

「少し休んだほうがいい、顔色が悪いぞ」

ティアは上の空で手ぬぐいで顔を拭くと、丁寧にたたんでアーチャーに返して手袋をしっかりとつけ直して弱々しげに笑った。

「心配性だなあ。このくらい大丈夫よ。」

ちよつと、むこうの川で顔洗ってくるわ。よつと」

身体を重たげに起こすと、ティアは川のほうに歩き出した。

アーチャーが何か言いたげにしているが、見ないふりをして川のほうへと行ってしまった。

ルークは行ってしまったティアと不機嫌なアーチャーを交互に見比べていたが、どうでも良くなってたため息と共に座り込んだ。

「あー、だつせーなあ。なんだよ一体」

「ふん、大方世間知らずで我侘なお坊ちゃんの相手をしていて消耗したのだろ。わがマスターながら心優しいことだ」

「なんだと!？」

突っかかっついていくルークを見やって、アーチャーは嫌みつたらしい語調で答えて、またティアの方に目を向けた。ほんの少し目を陰しくして黙り込む。

「なんだよ」

「いや、なんでも」

そう言いつつも、ティアのほうへ向ける目をそらしはしなかった。

「ごめんなさい。待たせたかしら」

「ティア、やはり今日はもう休んだほうがいい」

「え、ええ?まだ日が高いわよ?」

アーチャーの言葉に少しの焦りを滲ませて答えたが、やはり過労の色は隠せていなかった。

「今日はここで野営にしよう、いいな」

「えー」

「やった、つつかれたー」

ティアは不満げな顔をしたが、ルークのご機嫌な声を聞いて諦めたの、かしぶしぶまた座り込んだ。栗色の髪を手袋をした手で戯れに漉いてぶつぶつ言っている。

「もう、大丈夫だつて言ってるのに」

「ごまかしても無駄だ。もう、魔力がほとんど残っていないぞ。サーヴァントの呼び出しで魔力をだいぶ持っていかれたというのに、こんな無茶をするなど無謀にもほどがある」

ティアはクドクドと説教をするアーチャを恨めしげに見ていたが、彼は歯牙にもかけず言葉を続けた。

「まったく、それなのに残りの魔力で限界の身体を動かすなど自殺行為だぞ。」

こんなことでマスターを失うなど、笑い話にもならない」

「……ごめんなさい」

しょんぼりとした顔を見て表情を緩め

「まあいい。過ぎたことはしかたあるまい」

そう言つて、ティアの頭を軽くぼんぼんと叩く。

ティアは少し不思議そうな顔をしたが、やわらかい笑顔を浮かべて頷いた。

それをルークは何故か機嫌を損ねた顔で見ている。

「あーもう！よくわかんねーけど、これからは気をつけるんだぞ！

俺さまが師匠に習った剣でしつかり守ってやるんだから、お前は責任持って俺を屋敷まで連れてけ！

自分の言ったことは責任取れよ！」

「ほほう」

ルークの言葉にアーチャーはにやりと笑った。

「その言葉、間違えないな」

「お、おう」

妙な迫力にうろたえながらそう答えると、アーチャーは朗らかな表情で続けた。

「ならば、暫く私は霊体化していよう。なに、あれだけ実践を積みば何とかなるだろう。魔力の消費を抑えればそれだけマスターの負担も減るしな」

そう言つと、一瞬の内に姿が見えなくなった。

泡を食っておろおろするルークにどこからともなく笑い声が聞こえる。

「き、消えた！消えちゃったぞ、おい！」

ティアは指を刺して動揺した顔でこちらを見るルークに苦笑して、

「そりゃそうよ。もともと魔力で無理やり実体化させてたんだもの。魔力をカットしたら霊体化するのは当然だわ」

「当然で、おい」

「大丈夫よ、すぐそばに控えてるし何かあったらすぐに実体化して対処してくれるわ。そうでしょ？」

『もちろんだ。マスターの盾となり剣となるのがサーヴァントの仕事だ』

苦笑にも似た声音で、どこからともなく声が降ってきた。

「うお！びっくりした！なんだよいきなり！」

「・・・びっくりした？」

「・・・え？もしかして今の聞こえた？」

ルークはおろおろとあちらこちらを見ている。

「・・・アーチャー」

『了解した。お坊ちゃんこの声が聞こえるかね？』

「っだー！だから坊ちゃんて言っくんじゃねー！隠れてないで出て来い！」

「えー？」

ティアは目を丸くして呆然と立ちすくんでいる。

『ルーク聞こえる??』

「だーうぜー。何だよさっきから」

拳を振り回してガーガー唸るルークを見やって、ティアは頭を抱えていた。

通常、何もせずにラインが繋がるなど有りえない。しかも、マスターとサーヴァントと同時に繋がるなんて。

召喚陣に飛び込んできたことが原因だろうか？　だが、そんな事例など記録には残っていない。

うーんーうーんと唸ってるティアにルークはふと不安げな顔を浮かべて

「大丈夫か？　また具合悪くなったのか？」

と恐る恐る聞いてきた。

ティアはその言葉に「大丈夫、何の問題もないわ」などと、笑って答えた。

なおも不安げにしているルークに「今日は私が腕を振るうわ、楽しみにしててね」、などと言いつつも、これからどうするべきか深く悩むのだった。

第四章 答えの出ない問い

「るるーるるらららーら、らららるららりらー」

ティアが鍋を掻き混ぜながら歌を歌ってる。

長い栗色の髪をしつかりと束ねて、目を心なしかキラキラさせている。

微妙にずれる音階も鍋のコトコト煮立つ音に混じって、絶妙なハーモニーを奏でている。

手持ち無沙汰なままで、ルークはなんとなくティアを見ていた。

ティアは変なやつだと思う。こんな辺鄙な森の中で変な男と突っ立ってるし、変なサーヴァントとか言う奴を引き連れてるし、俺の言うことを適当に聞き流すしかと思ったら、時々優しいし。

少なくとも悪い奴じゃないのかなあ。俺を屋敷まで連れてってくれるっていうし。

あー、でもせっかく外に出たんだからいろいろ見て回りたいな。でもなあ、うるせー小姑みたいな奴がついてくるからなあ。

そこまで考えて、ちらつと周りを見渡した。

アーチャーは相変わらず姿が見えない。

ついさっきまで、やれ少しぐらいは手伝えとか皿を持って行けなどと煩かったが、ティアに窘められて今はとても静かだ。

例えるなら執事のラムダスみたなものだろうか？ でも、そうだというには何か違う気がする。上手い諭えが見つからない、もしかしたら昔の俺なら分かる・・・？

いや関係ないや、気分悪りー。

できたよーという明るい声に呼ばれて、ルークは思考をカットして料理をせつせと並べているティアのそばに歩いていった。

夕焼けも姿を消して、無数の星が夜空を飾っている。

微かな草々のざわめきと虫の歌声が耳に優しく、子守唄を聞いているようだ。

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つようきらめいて見える。

一体、彼は何なんだろう。何故、召喚陣の上に落ちてきたの？あの剣は何で砕けたの？何でラインがつかなくなってしまったの？疑問ばかりが頭に浮かんで消える。

それでも、ラインを切つてしまわないのは、無理に手を加えようとして彼を傷つけることになるのを恐れたからだ。

でも、私情なんてそんなもの……。

櫛を梳く手を止めたため息を吐く。

そもそも、何でわざわざ送ってあげようなんて思ったんだろう。何かあったときのためにと、わざわざサーヴァントの存在さえ明かして。

いくら考えても答えは見つからない。

それでも、かわかることをやめるなど絶対にしたくない、と思っているのもごまかせない事実だった。

ため息を吐く。

「ため息ばかり吐いてると、幸福が逃げていくぞ」

いつからいたのか、すぐそばでアーチャーが呆れた顔をしてティアを見ていた。

「さつきからずっとその坊やの顔を見ていたが、始末をつける算段でもついたかね？それとも惚れた？」

「ば、馬鹿！ほ、ほれた？？な、ななななんのそれ！そ、そんなことあるはずないでしょ！ば、馬鹿なこと言っていないで、おとなしく霊体化してなさい！」

そんなことわざわざ実体化して言わないで。ライン越しで十分よ
！」

「そんなことをいうがな、先ほどからずっとライン越しで声をかけていたのだが」

ヤレヤレといった顔で肩をすくめ、苦笑交じりにそんなことをいつてきた。

「え？ああ？そうだったけ？」

「まあ、私としても恋の戸惑いにゆれる見目麗しい乙女の姿をじっくりと見られて得をしたがな」

「な、なななあn1k j!」

「ふっ、冗談はともかく、そろそろ寝たほうがいい。
休めるときに休んでおかないと、身体が持たないぞ」

「わ、わかったわ」

ティアは動揺した顔を隠して、手に持った櫛を小さな小箱に片付けて懐にしまいこみ、しずしずと毛布に潜り込んだ。相当疲れていたのか、すぐさま小さな寝息が聞こえてくる。

焚き火の跳ねるような小さな音が静かな夜の空間に響いている。

アーチャーは無言で周りを見渡すと、ため息を吐いて霊体化した。空を見やれば、譜石に付き従うように星が輝いている。

千里眼のスキル持ちであるアーチャーでも、さすがに譜石に浮かぶ文字を読むことはできない。

もちろん、読めたからといって意味のあるものではないのだが。

『^{スコア} 予言か・・・』

おかしな世界だ、何もかもが予言通りに進むなどと。

戦争も平和もすべて予言通りに進む世界。まるで機械仕掛けの箱庭のようだ。

決められたタイミングで決められた動作をこなせば、何もかもすべてが正常に動く世界。なんて寒々しいんだろう。

まあ、世界の奴隷として殺戮を撒き散らすことしか能のない私に、そんなことを言う資格などないだろうが。

ユリア・ジュネは何を思ってスコアを残したのだろうか。いや、そもそもスコアとは何だ？ 何もかもがすでに定められている？

それはまるで根源の渦のようではないか。では、第7音素は根源に何か関係があるのでは？

・・・いや、考えすぎか。どちらにしても判断材料が足りない。

炎の跳ねる音と寝息が聞こえる。

ティアは小さく寝返りを打って何かを引き止めるように手を伸ば

し、パタツと降ろした。うにゃむにゃと何か寝言を言っているようだ。

アーチャーは姿を現すとティアに毛布をしっかりとかけなおした後、優しく髪をなでた。

召喚されてその夜に、この世界には魔術は存在しないとハッキリと彼女は言い放った。この世界で主流なのは譜術という音素を用いた術だと。

しかし、彼女の使っている術はどう見ても自分が慣れ親しんでいる魔術だ。

その存在しないはずの魔術を使うこの少女は一体何を背負っているのだろうか？

異世界の英雄は夜の帳が空けるまでの間、答えの出ない問いに身を沈めていた。

「ルークー！！ねえ見て！蝶々！」

「だぁー！！見りゃわかるだろ！うっせーな」

旅路は小さな衝突を繰り返しつつも順調に進んだ。

なんだかんだ言いながらも、走り出すティアを追いかけていくルークに、アーチャーは霊体化したままの姿で思わず笑みを浮かべた。心配した魔物との戦闘も危なげなくこなせるようになり、余計な魔力の消費も抑えられてティアが体調を崩すこともなかった。

戦力増強のために、森の中でわざとルークに魔物をぶつけた甲斐があるというものである。

「ティア！」

遙か遠方に立ち上がる煙と光を見て、アーチャーは前方を走るマスターに声をかけた。

「わかつてる」

ティアはまっすぐ音が聞こえた方向、すでに通り過ぎたローテルロー橋の方を見つめて、何が起こったのかと険しい表情で探っていた。

「あれは・・・マルクト軍?? 陸上装甲艦が何を追ってるのかしら」
首を傾げて考え込んだ。

「はあ? マルクト軍?? つーか、見えるのかよ」

ローテルロー橋はすでに遙か彼方で、ルークの目ではとても確認できない。

「どれだけ目がいいのだろうと変なものを見るような目で二人を見た。」

「え? あ、ええ、見えるわよ? ルークも見たい??」

「見れるのか! 見たい!」

ルークは瞳を輝かせてティアの方に詰め寄った。

「いいわよ。アーチャーちょっと視界を借りるわよ」

「何もそこまでしてやらねえとも」

アーチャーが困惑したような顔で二人を見ていたが、ティアはそれにかまうことなく、ルークの肩を掴んだ。

「ちよつとごめんね」

そういつてティアはルークの額にこつんと自分のおでこをくつつけた。

ルークは驚いて、身体をよじって飛び退き、指差した腕をぶんぶん振ってティアに向かって叫ぶ。

「な、何しやがんだおまえはー!!」

「ちよつとー、それじゃあ術をかけられないでしょ。見たいんじゃないの?」

ティアは口を尖らせて不満そうな顔でルークを見た。

「くつつかないと見せられないんだから、ほら!!」

そういつて、強引に引き寄せると額をくつつけて小さな声で何かを唱えた。

すると、いきなり視界が変わって威風堂々とした大型の乗り物が土煙を立てて猛スピードで走っていくのが見えた。

陸上装甲艦は暫く砲弾を打ち合っていたが、突然その場に停止した。

すると突然前方に光と炎が立ち上がり爆風を放って、もうもうとした黒煙と共に石でできた橋が崩壊していった。

と、いうところでふっと視界が元に戻った。

ルークが目を丸くして顔を上げると、ティアの綺麗な顔がすぐそばにあるのに驚いて慌てて飛びのいた。

「な、なんだよあれ！」

「だから、マルクト軍の陸上装甲艦だつてば」

「そうじゃなくって、なんでそんなのが見えるんだよ！」

「ああ、ルークの視界に私のライン経由でアーチャーの視界を移したの。よく見えたでしょ？」

「はあ？なんだそれ」

「もう、そういう術なのよ。その程度の認識でいいわ。どうせ細かい説明してもきかないだろうし」

「はあ・・・」

その言葉に反発しなくてもなかったが、どうせ説明されても小難しい単語を並べられるだけだろうと気にしないことにした。

「アーチャーの視界ねえ。・・・気持ちわりー」

「それはこちらの台詞だ」

アーチャーが苦虫をかみ殺したような顔ですぐそばに立っていた。

「うおわーびっくりしたー！」

ルークの言葉を無視してティアを見て言葉を続ける。

「術をつかったようだが身体は大丈夫か？」

「心配性ね、大丈夫よ」

いたずらっぽく微笑んでティアは己の従者に答えた。

「それに魔力はルークから拝借したし」

アーチャーはルークを見た後、納得したように「なるほど、それなら問題はない」とうなずいたのだった。

「は？何の話だよ！おいこら！」

「それにしても困ったわ」

文句を言っているルークを無視してティアは言葉を続けた。

「こんなところでマルクト軍にぶつかるなんて。面倒なことにならなければいいんだけど。」

ケセドニアにまっすぐ行く道は難所だから、遠回りでエンゲープに向かっているけどもしかしたら失敗したかもしれないわね」

「ふむ、そこまでキムラスカとマルクトとの関係は緊迫化しているのか？」

「そうね。今は辛うじて均衡を保っているけど、辺境では小規模な戦闘が起こったりしているらしいわ。すぐに戦争することになることはないでしょうけど・・・」

「うだー！いいからとっとと行くぞ！
いいかげん野宿は飽きた。早く町にいった宿屋のベッドで寝るぞ
！」

そんなルーク言葉に二人は顔を見合わせ苦笑するのだった。

第四章 答えの出ない問い（後書き）

ケセドニアへの道はルークたちの装備では突破するのが難しいという
うことにさせていただきました。

この小説での独自設定です。ご了承ください。

NGシーン 第一章〜第四章（前書き）

本編に関係の無いコネタです。特に読まなくても問題はありませぬ。
息抜きにどうぞ。

NGシーン 第一章〜第四章

第1章

テイク1

「問おう。君が私のマスターか。」

そこにはよくわからない大きな体格の生き物が立っていた。
緑色でぼつちやりとした身体、大きな目をしてこちらを見ていた。

「さーヴぁんと、らいだー。召喚に従い参上しましたー。
真名はガチャピンだよ、よろしくね」

「チェンジ」

テイク2

「問おう。君が私のマスターか。」

そこには赤いモジャモジャ髪の毛の白い肌にくく大きな唇が特徴の明るい空気の人を立てていた。

「サーヴァント・ランサー、召喚に従い参上したよ。

世界中の子どもたちに愛を振りまく優しいピエロ、ドナルド・マクドナルドだよ。

よろしくね、らんらんるー！」

「らんらんるー」

「らんらんるー」

ティアとランサーは踊りだした！！

第2章

「はいはい、わかったから早く食べてね」

めんどくさげに軽い感じで追い立てられて、ムツとしたがそれでも空腹を感じていたのでしかたなく食べることにした。

「む、むむむ！！」

このスープを作った奴は誰だぁー！！！！

俺が海原 山の孫弟子だとしての狼藉かぁー！！」

アーチャーが爽やかな笑顔で

「殺してしまっても構わないかね？」

とティアに聞いていた。

第3章 道中にて

「誰と聞かれてもな。さて、なんと答えれば満足なのかね？」

アーチャーは変わらないペースでヤレヤレと首をすくめ、鼻を括ったような言い方で返事をした。

ムツとして詰め寄ろうとしたルークを制して、代わりにティアが口を開いた。

「ウルトラの国からやってきた光の戦士、正義の味方のウルトラヒーローよ」

「え？」

「この星を悪の宇宙人から救うために、わざわざ数億光年の彼方からやってきたの」

「おおー」

「そう、その名はウルトラマンシロウ！」

残念！ 3分立ったので帰ってしまった！！

第四章

ティアは金色の櫛で髪を梳かしながら、眠るルークを見ていた。炎の陰影が揺れて赤い髪がさらに燃え立つようきらめいて見える。

ティアはおもむろにマジックペンを取り出すとルークの額に「肉」と書き鼻の下にガイズル髭を書き込んで満足げにうなずいた。

「ティア・・・、何をしてる」

「やっぱりこれって定番だと思うの。アーチャーも何か書く？」

アーチャーはペンを手に取ると、頬にぐるぐると丸を書いて鼻の先端を黒く塗りつぶしたのだった。

NGシーン 第一章〜第四章（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

第五章 無知とリンコ

窓の向こうに白い森が続いている。

何もかもが雪に埋まって、わずかに見える木々さえも白く染めてしまおうというかのように、粉のような雪がさんとさんと降っていた。ぼーっとそんな風景を見ていた。

呼びかける声が聞こえて振り向くと……。

「ルーク、ルークってば！おーきーてー！！」

「ううーん。ティア、もつと寝かせるよー」

弾むような声にまぎれて、夢の白い幻影は消えてしまった。

「早く起きないと、毛布剥ぐよー」

「10秒前、9・・・省略！はい、終了ー」

フェイントを突いて、おもむろに毛布を引っ張った。

ルークがすっかり毛布に抱きついてたせいで、ルークも一緒に引きずられていく。

「いててててー！！」

「ティア、毛布が痛む」

アーチャーのどこかのんびりした言葉に、ティアはハツとして立ち止まった。

少し困った顔で毛布とアーチャーの顔を見比べた後、「毛布さん

「ごめんなさい」と申し訳なさそうな声で謝った。

ルークはガバツと立ち上がると、顔を真っ赤にして「毛布に謝まってないで俺に謝れ！！」と叫んだが、全然反省する様子も無い。

「やれやれ朝から元気なことだ」

軽く首を振って呆れた顔で二人を見た後、濡れた手ぬぐいをルークに投げ渡し手元のこまごましたものを片付けながら言い放った。

「早く準備しろ、このペースなら昼にはエンゲーブにつけるだろう。まあ、箱入り息子のお坊ちゃんか道の真ん中でダダをこね始めれば無理だろうがな」

「やんねーよ！」

「ふ、だといいんだがな」

「くーむかつく！」

ルークは拳を震わせて睨みつけ、アーチャーはどこか楽しそうなティアに声をかけた。

「ティアもだ。坊主で遊んでないで、早く準備をしろ」

小うるさい言葉に追い立てられて、二人はいつものように食事を始めた。

ルークは質素な食事にかなり不満そうな顔をしているが、文句をいうと途端にアーチャーがすごい勢いで小言を言い始めるので黙っている。

「好き嫌いをしていると大きくなれんぞ」

黙っていてもやはり小言は付き物のようである。

ルークは小魚のフライを一齧りして、すこし嫌な顔をして皿の脇によける。

そしてその横のイモのサラダに手をつけようとしたところで、ティアが声をかけた。

「ルーク、フライいらないの？」

「ああ、魚嫌いだ」

「えー、美味しいのに」

そう言いつつ、おもむろにルークのほうに手を伸ばすと食べかけのフライを摘んで口に入れた。

「うん。おいしい」

「あー、人の口つけたものを食べるのはよくないんだぞー」

「え、そうなの？どうして？」

「・・・あれ？なんでだろ？」

残念ながら、ルークは間接キスなどという概念を知らなかった。そして、ティアの方もそれは範疇外だった。

アーチャーはそんな残念な会話を無言で聞かなかったことにして、もっぱら給仕に専念していたのだった。

「あ、そうだ。ルークにお願いしたいことがあるんだけど」

「あん？」

エンゲーブに続く道を歩いているとき、ティアはおずおずといった調子でルークに声をかけた。

ルークはおやつにと渡された、小さなたい焼きを口に入れつつ振り向いた。

「アーチャーのこと黙っててほしいの」

「はあ？なんで」

ティアは自分の口をハンカチで拭って、ポケットにしまうとしどしど困った顔で言葉を続けた。

「えっと、ここから先は敵国の勢力圏内だから、念のために奥の手は隠しておきたいの」

「いいじゃんべつに」

あっさりと言い放つルークに、ティアは眉をひそめ固まった後、ちよっと考え込んですぐにどこか意地の悪い笑顔を浮かべた。

「それにサーヴァントのこと誰かに知られると大変なことになるの。例えばね・・・ちよっと耳貸して」

ティアは顔をそっとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始

めた。

「サーヴァントをばらしたらね・・・ごによごによごによ・・・。それでその人は・・・ごによごによ。で、そしたらね・・・なの」「

最初はめんどくさげな顔をして聞いていたが、だんだんと顔を青ざめさせて立ち止まり、ギギギと首を動かしてティアの方を振り向いた。

「まじで?」

「うん」

「わ、わかったよ!べ、別に怖いわけじゃないけど、ティアがそんなに言うなら黙っててやるよ!」

手をぶんぶんと振り回して言った後、ルークは勢いよく歩きだした。

そんなルークの後姿を見ていたティアにアーチャーが不審げに声をかけてきた。

『ティア、いいのか?』

「ばれなきやいいの、ばれなきや。念押しに軽い暗示もかけておいたから問題ないはずよ」

『なるほど』

「おい、早く行くぞ!」

「わかってるってば」

ティアは荷物を持ち直して、ルークの後ろを追いかけたのだ。
った。

風車が青空を巻き込んで大きな羽をぐるぐると回している。

草原に姿を現したエンゲープは穏やかで、さまざまな作物が植えられている。

ある場所では華美さは無くとも暖かみのある花々が咲いて、またある場所では実を鈴なりにつけて重みで体を揺らしている。

ティアはルークと露天に向かう道をゆったりと歩いていたが、ブウサギの柵の前でぴたつと足を止め、ブウサギを見つめたまま無言のまま身動きもしない。

「ティア、ティア！！行くぞ！」

「え、あ、うん。わかったわ」

はっとして返事をする、名残惜しげに時々振り返りつつ、ルークが行く先についていった。

露天ではさまざまな作物が並べられ、軽快な売り声が道々に響いていた。

ルークはその活気に驚き、歓声を上げた。

さつきまでの不機嫌はどこへやら、周りをキョロキョロと見渡している。

エンゲープの町を外から見たときは、汚いだの狭いだの臭いだの

散々文句を言い放っていたがそんなことも忘れて、道々に並んでいる店を夢中で見ている。

ティアはそんなルークになんともいえない表情を向けていたが、横から店主の引き止める声に足を止め売り物に目を向けた。

と、そのすぐそばで店主と客が噂話を始めていた。

「おお、聞いた聞いた！漆黒の翼がマルクト軍に追いかけてられたんだろ？」

「ああ、危機一髪のところを華麗に逃走したらしいぜ」

「ローテルロー橋が落ちたってな」

「まあ、追い詰められたらなあ。でももしかしたら漆黒の翼じゃなくてマルクト軍が・・・」

「馬鹿、マルクト軍がするわけ無いだろ？」

「そんなもんか」

「しかし、漆黒の翼もよりによって橋を落とすなんて・・・」

「まったくだ、流通が・・・」

『どつやら、あのときの騒ぎは漆黒の翼とやらのせいらしいな』

『そう見たいね・・・こつちこつちどつちどつちがいいかしら』

2本のとうもろこしをつかんで比べるようには見てるティアに、アーチャーは迷わず片方を指し示すと、呆れたように続けた。

『それよりいいのか？』

『へ？』

こんな旅の途中で買ってどうするのか、ホクホク顔でとうもろこしを買い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

指先の向こうではルークが店先のりんごを前に店主と大騒ぎをしている。

片手に食べかけのりんごを持っておろおろしているようだ。

大変！と買ったものを仕舞い込むと、慌ててティアは走り出した。

ルークは綺麗に切ったりんごを頬張りながら、羽ペンを滑らせていた。

軽い気持ちで齧ったりんごせいで酷い目にあった。

漆黒の翼という盗賊と勘違いされて、町の男たちに囲まれて引きずられた拳銃、ローズっていうおばさんとジエイド・カーティスっていう嫌味なおっさんの前に突き出されたのだ。

後からやってきたティアはティアで、下手にファブレの名前を名乗るなっ指図してくるし。(それにしても、齧ったりんごの代金はティアが払ってたし、食べ物でなんであんなに騒ぐんだろう?)

ティアがそのカーティス大佐？に漆黒の翼はマルクト軍が追いかけてただろということと話してるところで、導師イオンってのがひよっこりと顔を出してチーグルが盗んでいったって言い出した。

引きずっていったおっさんたちは謝っていたけど、腹の虫がおさまらねー。

ティアはなんか機嫌が悪いし、アーチャーは嫌味たらたらだし・
。

つらつらと、いままでのことや今日あったことなどを書き記して
いるところで、ひょっこりとティアが頭越しにノートを覗いてきた。

「ルーク、何を書いているの??」

「うわ、見んなよ」

「ごめんなさい、でも・・・」

「あーもう。ただの日課！記憶障害が再発したときのために日記を
つけとけて言われてるんだよ」

「・・・記憶障害?」

探るような目に目をそらしてルークは言葉を続けた

「10年前のことはゼーんぶさっぱり。一つも思い出せやしねー。
それなのに危ないから屋敷から出るなって、ずーっと屋敷の中で
軟禁。やってらんねーよ」

「それはいかな」

アーチャーは音も無く姿を現すと、訳知り顔で話し始めた。

「記憶を取り戻したいのであれば屋敷の中にとどめておくよりも、
さまざまな場所に行つてさまざまな経験をつむべきだ。

今まで行つた場所や思い出の場所、友人知人に合つてみるのもよ

いな。とにかく現状維持など悪手としか思えん」

「そうね、いままでとは違う場所で働くのもいいかも。例えば果物屋さんとか？」

「そうだな、運搬行や農業なども悪く無いだろうな」

「あと、ぬいぐるみを着る仕事とか、ドレスを仕立てる仕事とか」

「ふむ、舞台上で女形をやるのも似合うかも知れんな」

「そんな仕事やってられるか、馬鹿！」

口の中に放り込んだりんごは何故かすっぱかった。

第六章 ローレイ教団の象徴

不機嫌な顔でルークはベットに飛び乗った。

いつも二人して人をからかいかやがって！

そんな風に思っ、彼は組んだ足に肘をついて手に頬を乗つけたまま唸った。

だいたいなんだ？なんで食べ物が盗まれただけで、あんなに大騒ぎするんだ？どいつもこいつもわかんねー。

宿屋の丈夫で素朴なベットは彼を乗せて軽く軋んで、清潔な木綿のシーツは太陽の匂いがした。

屋敷の優雅な生活に慣れているルークにとって、そんな素朴で質素な宿屋はとも違和感の感じられるものだった。

落ちて着いて見て見れば、旅の途中にあれだけ望んでいた宿屋も自分の屋敷と比べてしまっ、不満ばかりが胸に浮かぶのだった。

それをなんでもないことのようにして、隣でくつろいでるティアを見ると何故だかいらいらして、どうしていいのかわからなかった。

ティアは手元に地図を広げて、これからの道筋を確認しているふりをしつつ、機嫌の悪そうなルークをちらちらと見ていた。

アーチャーの機転で気まずい雰囲気になるのは避けられたが、彼の機嫌は最悪でちょっと突っつくだけで風船のように弾け飛びそうだった。

そんな不器用な二人をアーチャーはやれやれと見ていた。

サーヴァントは子守やお見合いを取り持ったためのものではないのだがなあ。

そんな風に思っ、軽くため息をついた。

そういえば、と言葉を譲り合うような雰囲気の中でアーチャーが話し出した。

「あの導師イオンというのは何者だね？」

あの年ですいぶんと敬われているようだが」

「そうね、ローレイ教団のことは説明したかしら」

「ああ、天才譜術士ユリア・ジュエが残した2000年に渡るすべてを記録する預言^{スコア}だったかを守り、預言を詠む事で人を導くという世界的な宗教団体だったな」

「そう、導師イオンはローレイ教団の最高指導者よ。」

マルクト帝国とキムラスカ・ランバルディア王国の休戦に尽力した方で、平和の象徴とも言われているわ」

アーチャーは顎に手を当てて、難しい顔をしてティアを見た。

「なんでそんな人間がこんな辺鄙な場所に・・・」

「ええ、どうやらあのカーティス大佐と行動しているようだけど、いったい何のつもりなのかしら。」

^{フォンマスターガードイアン}導師守護役がそばに付いているみたいだから、ローレイ教団も公認の旅なのだと思うのだけれど・・・」

「導師守護役？」

「導師の親衛隊よ。神託の盾騎士^{オラクル}団の特殊部隊、公務には必ず同行するの」

「しかし、わざわざマルクト軍の大佐と行動するなど不自然だな。軍と行動せずとも教団にも兵力は存在するのだから？」

「ええ、神託の盾騎士団というのがそれにあたるわね」

「ふむ、神託の盾騎士団を使えない理由があるのか・・・？」

「どうしてもマルクト軍に頼まなければいけない理由があるのか、それとも強制されているのか」

「強制されているって感じではなかったわ」

「それは一見ただけでわかるものでもあるまい」

「そうだけど」

「あーうつせー！」

ルークは話を途中まで興味しんしんで聞いていたが、導師がマルクト軍と行動している理由の考察に入ると、そのまどろっこしさにいらいらし始めた。

「ぐだぐだ言っつてねーで直接聞きに行けばいいじゃねーか。めんどくせー。」

「だいたいなんだよ、チーグルつて。聖獣だか何だかしらねーがなんでわざわざ食料庫なんざ漁るんだよ」

「ルーク、直接つて言っつても彼らが正直に話すわけ無いでしょ。目的によつてはこちらが排除されることだつてありえるわ」

「ティア、先ほどから気になっていたのだが、チーグルとはなんだ？」

「ずいぶんと、大切にされているようだが」

「東ルグニカ平野の森に生息している草食獣よ。始祖ユリアと共にローレライ教団の象徴になっているわ。」

「生息地は、そうね、ちょうどこの村の北あたりかしら」

「ふ、聖獣がこそ泥か。聖獣とやらもずいぶんと落ちたものだ」

「アーチャー、そんな言い方ないわ。そう、きっと何か理由が……」

「理由があるうとなかろうと泥棒は泥棒だ」

「あーめんどくせー。決めた！ チーグルの棲む森ってのはエンゲープから北だって言ってたよな？」

「え、ええ、それがどうかしたかしら」

「明日になったらその森に行って、そいつらが泥棒だって証拠突き止めてやる」

「はあ？」

「このままじゃ、帰るに帰れねー。やってもいないことを押し付けられるなんて我慢なんねーよ。きっちり締め上げてギッタングットンにしてやる」

「ルーク、何もそこまでしなくても……。
でも、チーグルかあ。チーグル……みたいかも」

「ティア？」

「え、いやあのその、わざわざ聖獣に指定したくらいだからきっと可愛いには違いないと思ったり思わなかったり、でもちよつとあのその・・・」

ティアは両手をぶんぶんさせて首を振りながらそんなことを言った。

顔を赤らめて恥じ入るように言葉を詰まらせる。

アーチャーは眉間にしわを寄せて額に手を当てて、痛みをこらえるように黙り込んだ。

そんな二人をルークは首をかしげて見ていたが、発明家が発明の糸口を見つけたかのような笑顔を浮かべると、ティアのすぐそばに走りよった。

広げた地図をわたたと片付けているティアのすぐそばにしゃがみこみ、にかつと笑っていった。

「じゃあさ、一緒に行こうぜ」

「一緒に？」

「そう、一緒に」

困りきった顔でルークを見つめるティアに、焦ったように顔を背けて顔を掻き、もぞもぞした態度をしていたがすぐに開き直った態度で叫んだ。

「いいから、明日、絶対、行くの！」

「私は反対だ」

「え？」

アーチャーは黙り込んでいたが、皮肉っぽい表情でそう言い捨てた。

「マルクト軍がうろつろしているようなところで物見遊山など正気とは思えん。」

ただでさえ、キムラスカの貴族なんていう爆弾を抱えているのに、うろつき回るなど虎の尻尾を踏みに行くようなものだ」

「はあ？なんだよそれ。俺が悪いって言うのか？」

「ああ、お前が悪い」

「・・・」

「・・・」

「サーヴァントとして、マスターをキムラスカとマルクトのゴタゴタに巻き込ませるような真似はできないな」

「うっせーな！なんかあったら、俺が！親父に頼んでも何とかしてやるよー！」

「てめーはおとなしく後ろでうじうじしてる！」

「ほう、その言葉間違えないな？」

「も、もちろんだよ」

「と、彼はいつてるがどうする？」

緊迫した彼らの言い合いに、言葉も挟めずにおろおろしていたティアは、いきなり言葉を振られてびくつとしてアーチャーを見た。

「私としては反対だが、マスターがどうしても行きたいというのであればマスターの意思を尊重する。サーヴァントとして最大限マスターの安全を保障しよう」

ティアは不機嫌なルークと皮肉げな表情をした己の従者を交互に見たあと、己の意思を控えめな表情で述べたのだった。

色鮮やかな緑が日の光に輝き、何かの鳴き声が木々に反響して聞こえる。

アーチャーは護衛対象の二人からわずかに離れ、木に登って上から彼女らを見ていた。

ルークは相変わらず偉そうに何事かをあれこれと言って、ティアはティアでそんなことを気にも留めずに忙しなく周りを見渡し、あれこれと指し示しては何かを言っていた。

そんな二人を木の上から暫く見ていたが、彼女らが行く先に何かが起こっているのに気づいて、己のマスターへ急いでそのことを伝えることにした。

「え？イオン様が？」

「あん？どうした？あの陰険白髪親父がまたなんか言ってるのか？」

「・・・あとで説教決定ね。それより！向こうでイオン様が魔物に襲われてるって、アーチャーが」

「せつきよ・・・いやそうじゃない、なんで魔物なんかに」

「急ぎましょう、護衛は一体何やってるの！」

そう言っただけでティアは森の向こうへと走り出した。
ルークも慌ててその後を追う。

暫く行った先に、白い法衣を着た少年が音叉をかたどった杖を構えて虎のような魔物を見据えていた。

3匹の魔物は唸り声を上げて、じりじりとその包围網を締めようとしている。

「あれは、ライガだわ！」

「おいおい、やばくねーか？」

飛び掛つてくると見るやいなや、厳しい目つきで拳を振り上げて光輝く音素フォニムを手のひらに集め地面に手を打ちつけた。すると地面に光で書かれた譜陣フシジマが描かれて、一瞬にして魔物たちは光の中に消え去っていた。

疲れきった顔を上げて立ち去ろうとしたが、立ちくらみを起こして崩れ落ちた。

「イオン様！」

「お、おい！」

二人は慌てた表情でイオンのそばに駆け寄った。ルークはすぐそばにしゃがみこみ大丈夫なのかと声をかける。

彼は繕った笑顔を浮かべ大丈夫と答えた。

「少しダアト式譜術を使いすぎただけで・・・、ああ、すみません」

ティアの差し出した手を取って立ち上がると、二人の顔を見て驚いた表情を浮かべる。

「あなた方は、確か昨日エンゲーブにいらした方ですね」

「ルークだ」

「ルーク。古代イスパニア語で『聖なる焰の光』という意味ですね。いい名前です」

彼はルークを見て優しげに笑ってそう言った。

その言葉を聞いてルークはすこし顔を赤くして、「そ、そうか」と言い捨てた。

「私は・・・、神託の盾騎士団モース大詠師旗下情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

畏まったようなすこし厳しげな表情を浮かべて、ティアはルークに続いて自己紹介をした。

「ああ、あなたがヴァンの妹の。彼はいまだ行方不明という話です

が、あなたも彼を探しに？」

「いえ、まあ任務中です」

ティアは複雑な表情を浮かべ、視線をそらした。

「はあ？お前、ヴァン先生の妹なのか？つか、行方不明って何だよそれ！」

詰め寄るルークに途方にくれたような顔をして周りを見渡して、あれ？といった表情を浮かべる。

「あれは……」

森の奥の木の影から長い耳の小さな影が素早い仕草で横切った。

「チーグルです！」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「あとでしっかり説明しろよな」と叫んで走り出した。

その後姿に、ティアは額に手を当てて軽くため息をついたのだった。

第七章 彼らの理由

「余計なことを言ってしまったでしょうか？」

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、遅かれ早かれ知られることですから・・・」

ティアはどこか力なく笑ってそう答えた。

「おい、お前ら早く来い！見失っちゃまうじゃねーか」

ルークの叫び声に二人は顔を見合わせた後、苦笑しあって歩き出した。

「あーもう、のろのろしてるから逃げられちゃった」

周りを見回しながら小走りで二人のすぐそばに戻ってくると、忌々しげに舌打ちをしてはき捨てた。

ティアはふつと虚空を見つめ黙り込んだ後、まっすぐ彼方を指差した。

「チーグルはあっちに行つたみたい、巢があるのかしら」

とても驚いた様子でイオンは彼女を見た。

「確かに聞いた話では、チーグルの巢はこの先に行けばあるはずで

すが・・・

しかし、何故？」

「企業秘密です」

ティアはにつこりと笑って疑問を封殺するかのようには答えた。

それを横で見ていたルークは呆れたように鼻を鳴らしたが、ふつとイオンを見て眉をひそめた。

「つたく、ふらふらじゃねーかよ。ろくに戦えないくせに、こんなところに来るんじゃないよ」

「すみません、ですがエンゲーブでの盗難事件がどうしても気になつてしまって・・・」

「はあ？何言つてんのお前？関係ないじゃんか」

「しかし、聖獣と言われるチーグルが人に害をなすなんて、何か事情があるはずです」

そういつてイオンはあごに手を当てて悩ましげに眉をひそめた。

「チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい。人間の食べ物を盗むなんて、おかしいんです。チーグルに縁がある者としては、見過ごせません」

「魔物のことなんて、放つときゃいいだろ」

「そうですね。僕は変わり者かもしれませんが」

ルークの無神経な言葉に、イオンは一瞬黙り込んで傷ついたような顔を浮かべたが、押し隠すように固い言葉で答えて矛盾する優しい笑顔を浮かべた。

「ですが、チーグルと接触できれば事の真相がわかると思います」

ルークは馬鹿にしたような顔で彼を見たが、断固とした態度を崩さないのを見て、呆れたように肩をすくめた。

「ふーん。つまり、目的地は一緒ってことだな」

目をぱちくりさせてイオンはルークを見た。

「では、お二人もチーグルのことを調べにいらしたんですか」

「濡れ衣着せられて大人しくできるかつつの」

鼻を鳴らしてそんな風に答えた後、ティアを指差して

「こいつはただ単にチーグルを見たいだけだけどな」

「ちょっと！わざわざそんなこと言わなくていいじゃない！」

ルークの大暴露に、顔を赤く染めて食ってかかった。今までの借りを返してやったぜと言わんばかりの勝ち誇った顔でニヤニヤしている。

「もう、イオン様の前でそんな話しないでよね。」

「イオン様、ここはとても危険です。ここから先は私たちが調

査をしますから、どうぞ村にお帰りください」

「いいえ、どうしても今回の騒ぎの真相が知りたいのです。」

ティアの冷淡とも取れる言葉にイオンは慌てて、言いすがった。

「チーグルは我が教団の聖獣ですし、彼らのやったことは教団にも責任があります」

「あーもう、仕方ねえな。お前も付いて来い」

「ちよ、ちよっとルーク！」

食ってかかるティアに軽く追い払うように手を振りながら、めんどくさそうに答えた。

「こんな青白い顔で今にもぶっ倒れそうな奴、ほっとく訳にもいかねーよ。」

それに村に送って行ったところで、また一人でノコノコ森へ来るに決まってる」

「あ、ありがとうございます！」

その言葉にイオンは顔を輝かせて、明るい声を上げる。

ずずっと身体を近づけて「ルーク殿は優しい方なんですネ！」と笑った。

ルークは顔を赤らめてそっぽをむくと、「アホなこと言ってねーで、大人しく付いてくればいい」などと言い放った。

「あ。あと、魔物と戦うのはこっちでやるから、あの変な術は使わないよ？」

「お前、それでぶっ倒れたんだろ」

「ま、守って下さるんですか！ 感激です！ ルーク殿」

それを聞いて慌てきつた表情で振り向いて、ほんの少し後ずさった。

赤い顔はさらに赤くなっている。

「お、大げさに騒ぐなっ！ 違うって、足手まといだっつってんだよっ！ それと、俺のことは呼び捨てでいいからなっ！ 行くぞ！」

「はい！ ルーク！」

イオンは嬉しくてしょうがないといった感じで頷くと、逃げるように森の奥へと走り出したルークの後ろを追いかけていった。

彼らの後姿をティアは物足りなさそうな羨ましそうな顔で見ているが、ふっと虚空を見つめくると表情を変えた後、慌しく逃げるように追いかけていった。

その後ろから、どこからともなく赤い騎士の笑い声が聞こえた気がした。

それから、木々の隙間を縫うように続く道をしばらく歩いていくと、小山のような大木にぶち当たった。

木の幹に捲るように大きく穴が開いている。

どうやらチーグル族の住処はこの木のうろの中にあるようだ。

イオンは無造作にその穴の中へ歩いていった。

追いかけるように続くルークの後ろで、ティアは軽く後ろを見渡して白い手袋を付け直すとしっかり杖を握りしめてその後が続いた。

うろの中はとても暗く、空間を支えるようにして無数の枝が絡み合うように伸びていた。滴るような緑色の苔が上から降り注ぐ日の光に輝いて、暗いうろの中は辛うじて足元が見えるだけの光を確保していた。

ルークとイオンは言葉を交わしながら、うろの中にいる大量のチーグルたちを見ていた。

その後ろからティアが入ってくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして壁際に張り付いてしまった。

ティアは驚いたように目を見開いていたが、やがてふっと顔を緩めた。

すると何故だかチーグルたちはほっとしたようで、小山のようだった塊はなだれのように元にもどっていった。

その流れにイオンは不思議そうな顔をしていたのだが、そんなことを考えている暇はないと考えて、チーグルたちに近づいていった。

チーグルたちの群れがわずかに左右に割れて、年老いた様子のチーグルが大きな腕輪をもって現れた。

「おぬしたちは・・・ユリア・ジュエの縁者、か？」

恐る恐るといった風に老いたチーグルは明瞭な言葉で問いかけて

きた。

「おわっ！ま、魔物が喋った！」

「ユリアとの契約で与えられたリングの力だ・・・。
お前たちはユリアの縁者か？」

イオンは軽く頷くと、誇るように名乗りを上げた。

「はい。僕はローレイ教団の導師イオンと申します。
あなたはチーグル族の長とお見受けしましたが」

「いかにも」

それを聞いて、ルークは傲慢な態度で指差して言い放つ。

「おい、魔物。お前ら、エンゲープで食べ物盗んだだろ」

「・・・なるほど。それでは、我らを退治にという訳か？」

「はっ、盗んだことは否定しないのか」

「チーグルは草食でしたね。何故人間の食べ物を盗む必要があるのです？」

「・・・・・・・・チーグル族を存続させるためだ」

イオンのすぐ横に並んで立っていたティアは無言で杖を握りなおした。

すると、チーグル族の長は慌てたように「ほ、ほんとうだ！」と

言い募った。

「わ、我らの仲間が北の地で火事を起こしてしまったのだ。その結果、北の一角を住み処としていたライガが、この森に移動してきたのだ。我らを餌とするためにな」

イオンは納得したように頷いた。

「では村の食料を奪ったのは、仲間がライガに食べられないようにするためなんですな」

「ああ、そうだ。定期的に食料を届けぬと、奴らは我らの仲間をさらって喰らう」

「そんな、なんてことを・・・」などと呟くイオンの横で、ルークは忌々しげにはき捨てた。

「はんつ、なんだよそれ。弱いモンが食われるのは当たり前だろ？ しかも縄張り燃やされた？ 頭にも来るのも当然だろうよ」

「しかし、しかしそうかもしれないませんが、そんなものは本来の食物連鎖の形とは言えません！」

黙って言い争う二人を見ていたティアは難しげな顔をして口を開いた。

「さて、どうしましょうか？

チーグルが食料泥棒の犯人だと判明しましたが、村に突き出したところで今度はライガたちが餌を求めて村を襲うでしょうね」

「しらねーよ、あんな村なんか」

ルークはふてくされたように言い捨てた。

「そうは行きません。エンゲーブの食料は、このマルクト帝国だけでなく世界中に出荷されています。あの村を失うわけにはいかない」

「食料の流通が滞れば飢え死ぬ人だって出てくるでしょうね」

二人は厳しい口調で次々とエンゲーブの重要性を説いた。

ルークはうろたえた様子で二人を見て、むくれたように顔を背けた。

「じゃあどうしたらいいんだよ」

「ライガと交渉しましょう」

「はあ？」

「交渉・・・ですか？」

イオンの提案に二人は驚きの声をあげる。

「そのライガつてのも喋れるのか？」

「僕たちでは無理ですが、チーグル族を一人連れて行って訳しても
らえば、もしかしたら・・・」

「では、通訳の者にわしのソーサリーリングを貸し与えよう」

長老が群れに向かって呼びかけると、群れの中から水色の毛をしたチーグルがおずおずとした様子で顔を出した。

長老に比べて一回りほど身体が小さくて、どうやらチーグルの子どもらしい。

「なんだあ？」

「この子どもが北の地で火事を起こした我が同胞だ。これを連れて行って欲しい」

長老から腕輪を受け取ると口を開いた。

「ミュウですの。よろしくお願いするですの」

「・・・なんかむかつくぞ、おい」

いらっとしてルークはチーグルをにらみつけた。

「ごめんなさいですのー」

「だあー、あやまるな！うっせー」

そんな理不尽なやり取りに、ティアはいつものように呆れたと言わんばかりのため息をついていた。

第七章 彼らの理由（後書き）

ほぼ、原作どおりの流れになります。

アーチャーの出番はほとんどなし。ごめんなさい。

第八章 守るべきもの

ライガクイーンの住処から遙か遠く、木々を挟んで肉眼では目視できない位置にアーチャーは立っていた。

太い枝の上に立ち、鷹の目を光らせてその獲物を確かに捕らえている。

アーチャーは弓を構えて100分の1秒も目を離すことなくその姿を見据えていた。

己のマスターを含む3人がその魔物に近寄るのを確認して、思うままに振るまえない自分に齒噛みした。

交渉などリスクが高すぎる。どこかに行って下さいと言って素直に従うなど、楽観的にもほどがあるぞ。あの導師はいったい何を考えているのだ？

ままならない状況に苛立ちつつも、マスターの指示が飛ぶのをただひたすらに待ち続けていた。

ルークは唸り声を上げているライガクイーンを見上げていた。

優雅にさえ見える毛並みは激しく逆立って、白い牙をむき出しにして今すぐにも襲いかかってきそうだ。

その威圧感に思わず剣の柄に手が伸びる。

ティアもすぐにも詠唱を開始できるようにと、すでに杖を構えていた。

「ミュウ、ライガ・クイーンと話してください。

私たちは交渉しにきたのだと」

イオンは武器を構える二人を制して、前に出て通訳するようにミュウを促した。

元気に返事をしてミュウはライガクイーンに近づいてまくし立てるように鳴きだした。

それを見てルークはなんとも嫌そうな顔をして、ティアは顔をすこしほころばせている。

ライガクイーンはゆっくりと身を起こすと卵を守るように前に出た。

懸命に何かを話しているミュウを睨みつけ、振り払うように咆哮をあげた。

ミュウは風圧に弾き飛ばされ、それをあわててイオンが抱きとめた。

「いますぐ去れって、卵が孵化するところだから来るなっっていうんですの」

「まずいわね、卵を守るライガは凶暴性が増すはず。

イオン様！ いったん撤退して軍に援軍を要請しましょう」

「はぁ？まじかよ」

「卵が孵ればライガの仔らは大挙して街に襲い掛かるわ。放っておけばエンゲープの街丸々一つが消滅しかねない」

「いけません！ ミュウ、ライガクイーンにお願いしてください。

この土地から立ち去ってほしいと」

「みゅー！ みゅーみゅーみゅー……みゅー……」

猛々しい叫びを上げて女王は前に歩み出る。

ミュウは泡を食って逃げ帰ると、切羽詰った風に訴えた。

「みゅー、ふざけるなって言ってますのー。」

ボクたちを殺して、孵化した仔どもの餌にすると云ってるのですの

「そんなー！」

「イオン様お下がりください！」

ティアは唾然とするイオンの腕を引いて彼の前に立った。

横にいるルークも剣を構える。

「おい、こんなところで戦ったら卵が割れるんじゃないのか？」

「かまわないわ、早いか遅いかの差よ」

「なんだよその言い方！」

「放置して孵化させてしまえば飢えたライガが街を襲うわ。」

生まれてくる仔らに罪は無いけど、もうしかたないわ」

「はぁ？ 意味わかんねー」

「来る！」

ティアはイオンにもつと後ろに下がるように指示すると、襲い掛かってくるライガの前面にシールドを展開した。

まごつくライガを睨みつけ、即座に離脱して横面から目を狙って

ダガーを投げつける。

シールドを前足で叩き割ってダガーを避けると、激しい咆哮を上げ雷撃が上空から降り注いだ。

命からがら避けたルークは、ティアに向かって飛び掛るライガクインを見て心臓を縮み上がらせるが、再び展開したシールドで防いでいるのを見てホッとすると、ライガクインに飛びかかった。

ライガクインの背面に勢いよく剣を振り下ろすが、強固な毛皮に跳ね返されてその衝撃で後方に跳ね飛ばされた。

『ティア』

と、どこからともなくアーチャーの呼び声が聞こえた。

『なに？ あなたの出演はまだよ。導師がいる前であなたを使えない』

焦ったようにティアも念話で答えると、苦笑交じりで返事をかえす。

『まあ、それもあるが。後ろ、観客が来てるぞ。』

『ふむ、どうやら演劇は強制終了のようだ』

何を感じたのか、ティアは術式を放棄して飛び退った。

「インディグネーション！」

上空から激しい雷撃が降り注ぎ、ライガクインは黒い煙を上げ

ながら倒れ伏した。

その衝撃で土煙が上がり沈黙が降り注ぐ。

「ジエイド！」

イオンのその言葉にルークとティアは構えをといた。

「ご無事ですか？ みなさん」

ジエイドはメガネを押さえて、ことさらに明るい笑顔を浮かべた。

言葉を交わしているイオンとジエイドを横目に、ティアは卵が置いてあるライガの巣に歩み寄った。

いくつかはすでに割れているが、運がいいのか悪いのか一個だけ割れずにそのままの姿で残っている。

ティアはそれを見ると顔を歪めたが、すぐに息をついて杖を振りかぶった。

と、その後ろからルークが腕を掴み取り、乱暴な仕草で引き止めた。

「なんてことしやがるんだ！」

「止めないで！」

「やめるよ、せっかく割れずにすんだのに」

「さっきも言ったでしょ！ 残しておいたら、あとあと酷いことになるわ」

「だけど！」

「あなたね、生かしておいてその後のことを責任取れるの？
できもしないくせに横から口出ししないで」

「ふざけんな。この冷血女！」

言い争う二人の横で、ピキピキと卵に亀裂が入り中から何か打ち
付けるような音が聞こえてきた。

それにも気づかず二人はいい争いを続けていた。

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐
る卵に近づいていった。

と、卵から突き破るように縞模様の顔が卵の殻を突き破った。

ミュウはびっくりして逃げ出そうとしたがそれよりも早くに卵が
バランスを崩して倒れるようにミュウの上にもたれかかる。

哀れミュウは卵の殻と生まれたてのライガの下敷きになってしま
った。

「みゅーー！」

生まれたてのライガはミュウを興味津々の顔で見っていたが、おも
むろに大きな口をあけてぱっくりと・・・するとところで、ルークに
救い出された。

ルークはライガの首根っこを掴んでまじまじと見た。

さっきまで対峙していた女王に比べれば凶暴さなどかけらもなく

て、くりくりとした目がルークを見つめている。

「ルーク、それを貸して」

ティアはダガーを構えて冷たい目で手を差し出したが、ルークは慌てて抱きしめて後ろに隠した。

「嫌だよ、ぜってーやだね」

「ルークー!!」

「だめだ!殺したらだめだ!」

「あなたね・・・」

「おやおや、まるで子猫を拾った子どもと母親のようですねえ」

言い争ってる上から必要以上に朗らかな声が降ってきた。

ジェイドは二人を面白そうな目で見ている。

「いいんじゃないんですか? 彼が責任とって育てるって言うてるんですし」

「カーティス大佐!」

「苗字は呼ばれなれていませんから、ジェイドでいいですよ。」

彼が責任を取って引き取って育てれば何の問題もないんじゃないですか?

「もちろんそうですね?」

ジェイドは観察するようにルークを見てそう言った。

「ああ、俺が責任とって育てるよ。それなら文句無いんだろ？」

「それは・・・」

ルークの言葉に心なしか身体を小さくしてうつむく。

「なら問題ないだろ？いいな？」

背中をよじ登りルークの赤い髪の毛をガジガジしているライガを撫でながら偉そうにティアに言った。

ミュウはそんな二人をおろおろしながら見ている。

「じゃあ、お話は終了ということで森から出ましょうか」

「駄目ですの。長老に報告するですの」

小さな身体を精一杯動かして、ミュウはジェイドに訴えかけた。

「魔物が人間の言葉を？」

「ソーサラーリングの力です。それよりも帰る前にチーグルの住み処へ寄ってもらえませんか？」

「いいでしょう。しかし、時間がないことをお忘れにならないように」

イオンの要請に頷いて、二人を見やると背を向けて歩き出した。

ルークたちもイオンに促されて、荒れ果て主を失った住処を立ち去った。

ライガの子どもはルークの頭に乗って、しっぽをゆらゆらとさせていた。

ティアはそれをチラチラと見ては、ハツとしたように目を背けていた。

しかし、誘惑に勝てなかったのかふらふらと手を伸ばす。

それに気づいたライガは歯を剥き出しにして唸りだした。

ティアはしょんぼりして手を引っ込める。

「嫌われてやんのー」

ルークの言葉に反抗する気力もなく、彼女は弱々しい声でほっといてよと呟いた。

しばし二人は黙ったまま歩いていたが、ティアが突然何かに気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのほうに走り出した。

止めるまもなく奥へと走っていったと思ったら、片手にりんごを持って走りよってきた。

「生まれてきたばかりなら、おなかですいてると思うわ。ぴったりとは言わないけどないよりはましね」

ダガーを取り出してりんごを丁寧に切りだし、その切れ端をライガに差し出した。

ルークは思わずライガを隠したが、ライガは興味心身でりんごの切れ端を見ていた。匂いにつられてぱくりと噛み付く。

しばらく、しゃくしゃくとした咀嚼音が森に響いていた。

あちこちに果汁が飛び散って、ルークはいらつとした調子で文句を言った。

「きたねーな。髪がべたべたするだろ」

「我慢なさい、責任取るんでしょ？」

「そうだけだよー」

そんな二人をジェイドは興味深げな目で観察していた。

チーグルの住処にて報告を済ませた後、一行は手を振って送り出すチーグルを背に歩き出した。

新しく仲間になったミュウも一行にまざり、時々振り返って手を振りつつ置いていかなれないように懸命に足を動かしていた。

「ご主人様、待ってくださいですのー」

「あー、うっぜー」

ルークはまとわりついてくるミュウを振り払いながら、不機嫌そうに歩いている。ミュウは何を思ったのか、ルークを自分の主人と定めたようで、追放処分を受けている間はルークのそばを離れないと言っただ。

とてもじゃないが受け入れられない話だったのだが、周りの進めもあってしぶしぶながら受け入れることになった。

頭の上でもぞもぞ動くライガを支えながら、気だるげに歩いているとようやく森の出口にたどり着いた。

「ん？ あいつお前の護衛役だよな」

先ほどライガの巢の中で、ジエイドに耳打ちされて走り去っていたツインテールの女の子が、森の出口でにこやかな笑顔を浮かべて立っていた。

何故かライガが唸り声を上げ始める。

「ええ、アニスです」

おかえりなさいと明るく少女が言う横から、マルクト兵が続々と走りよってきた。武器を構えてルークとティアを取り囲む。

「ご苦労様、アニス。タルタロスは？」

「ちゃんと森の前に来ちゃってますよ。大佐が大急ぎでって言うから、特急で頑張っちゃいました」

ルークがどういふことだと言い寄るのも無視して、前に立つマルクト兵たちに指示を飛ばした。

「その二人を捕らえなさい。正体不明の第七音素を放出していたのは、彼らです」

「ジエイド！乱暴なことは・・・」

「ご安心ください、イオン様」

にっこりと笑って、ジェイドは答えた。

「何も殺そうというわけではありませんよ。お二人が暴れなければ・
・ですがね」

ルークは思わず黙り込み、ティアは強い目でジェイドを睨みつけていたが、二人とも武器を下ろして抵抗をやめた。

それを確認するとジェイドは連行するよう言い放ち、兵士たちは武器を取り上げて、縛り上げると乱暴にタルタロスへと連行していく。

ルークは無言で隣を歩くティアを見て、ぎゅっときつく拳を握り締めた。

NGシーン 第5章〜第8章（前書き）

本編とは一切関係ないコネタ集です。
読まなくても何の問題もありません。
息抜きにどうぞ。

NGシーン 第5章〜第8章

第5章

『それよりいいのか?』

『へ?』

こんな旅の途中で買ってどうするのか、ホクホク顔でどうもろこしを買い込むティアにアーチャーは苦笑交じりに指差した。

つなぎを着たい男がルークに何か言っていた。

そして、ぽんと肩を叩いて・・・!

「だめー!やらないでー!」

荷物をしまつのもそこそこに駆け出した。

ティアは顔をそっとルークの耳のそばに寄せて小さな声で話し始めた。

「サーヴァントのことを話すとね、頭に木が生えてね、その木に実がなるの。」

そしたら、その実を狙ってたくさん鳥がよってきてね、木も毛も何もかも雫られちゃうの。

そしたらね、その穴に水がたまってね、魚が泳いで魚釣りができるようになるの」

「まじで?」

「うん、ほんと」

アーチャーはどっかですんな昔話を聞いたなあと遠い目をしていった。

第6章

「急ぎましょう、護衛は一体何やってるの!」

そう言ってティアは森の向こうへと走り出した。
ルークも慌ててその後を追う。

暫く行った先に、白い法衣を着た少年が音叉をかたどった杖を構えて、熊のきぐるみを被ったモースが懸命に何かを渡そうとしていた。

「おじょうさん(?)忘れ物ですよ」

「あら熊さんありがとうございます。」

お礼に アカシック・トーメント !!!」

だれがお嬢さんだー！という声が森に響いた。

森の奥の木の影から銀色の小さな影が素早い仕草で横切った。

「はぐれメタルです！！！」

そうイオンが叫んだのを聞いて、ルークは彼女と小さな影を見比べた後、「待ちやがれ！経験値！！」と叫んで走り出した。

第7章

「余計なことを言ってしまったでしょうか？」

額に手を当てて難しい顔で考え込むティアに、イオンは気遣わしげに彼女を見上げて、労わるような声で尋ねた。

「いいえ、泣いて謝るまで嫌いなにんじんを食べさせればきっと忘れてくれます」

朗らかな笑顔でティアはそう答えた。

得体の知れない悪寒に襲われて、ルークは思わず振り向いた。

その後ろからティアが入ってくると、チーグルたちは何に驚いたのか怯えたように後ずさり、ついには積み重なるようにして積みあがっていった。

そして、チーグルたちは合体し、巨大な顔が目の前に立ちふさがった！

キングチーグルが逃げ出した！

しかし、足が無いので動けない！！

第8章

横でおろおろしながら見ていたミュウは、それに気づいて恐る恐る卵に近づいていった。

と、おもむろに卵が上下真っ二つに割れて、しましまのライガが顔を出した。

ライガは卵の殻を両手で支えて、軽快にリズムを取って踊りだした。

噂によると、大きな街でダンサーとして一大ブームを巻き起こしたらしい。

しばし二人は黙ったまま歩いていたが、ティアが突然何か気づいたようで、周りを見渡すとあさつてのほうに走り出した。

止めるまもなく奥へと走っていったと思ったら、両手でムゴロウを引っ張って走ってきた。

「野生動物なら・・・元の場所に戻してきなさい」ええー!!」

ライガはしつぽをパタパタさせていた。

NGシーン 第5章～第8章（後書き）

ごめんなさい、ごめんなさい。

それなりに溜まったら、本編と分けようかなと思ってます。

第九章 選択肢の無い問い

仔ライガは目の前の檻をガシヤガシヤと叩いて、目の前に座るルークを見ていた。急ごしらえの小さな檻に入れられて、しょんぼりとした顔でしゃがみこんでいる。

その後、ルークたちはそのまま陸上装甲艦タルタロスに連行された。

不穏な笑顔のジェイドを前にルークとティアは椅子に座って、どうなるのかと不安げな顔を浮かべていた。

ミュウもちやつかり椅子を与えられて、行儀よく座っている。

彼らの前にはジェイド、イオン、アニスが並んで立ち、ドアをしっかりと締め切って、部屋はどこか息苦しい雰囲気をかもし出している。

「第七音素の超振動はキムラスカ・ランバルディア王国王都方面から発生。マルクト帝国領土タタル溪谷附近にて収束しました。

超振動の発生源があなた方なら、不正に国境を越え侵入してきたことになりましたね」

「・・・そういうことになるらしいな」

ルークは軽く顔を背けて、投げやりに答えた。

正直なところ、こんなよくわからない尋問なんてめんどくさくてやってられないと思っている。だが、だからといってよけいなことをして事態が悪化したらまずいと思うのだ。

こういうタイプはきつと、口を滑らせたら酷いことになる。

(アーチャーがそのいい例だと思う。旅の途中ではそれでしょうっち

ゆう酷い目にあつた)

「おや、自分のことなのにずいぶんと適當ですねー」

「うるせーよ」

やっぱりむかつく！

ムツとした顔でその苛立たしい顔を睨みつけた。

「ま、それはさておき」

ジエイドはあっさりと流して、言葉を続けた。

「ティアが神託の盾騎士団だということは聞きました。

ではルーク。あなたのフルネームは？」

「ルーク・フォン・ファブレ。」

お前らマルクト軍が誘拐に失敗したルーク様だよ」

その言葉に彼らは驚いた様子でルークを見た。

「キムラスカ王室と姻戚関係にある、あのファブレ公爵のご子息・
・というわけですか」

ジエイドは何か思い巡らせながら、控えめな調子で言葉を重ねた。
その横でアニスは何故か、目を輝かせてルークを見つめている。

「何故マルクト帝国へ？ それに誘拐など・・・。
穏やかではありませんね」

「俺の知ったことかよ。」

お前らマルクトの連中が俺を誘拐したんだろーが」

「少なくとも私は知りませんね。先帝時代のことでしょうか」

「ふん、こつちだつて知るか。」

おかげでガキの頃の記憶がなくなつちまつたんだから」

ジェイドは不審げに眉をひそめて何かを呟いた。

「な、なんだよ」

「いえ、何でもありません。ただの独り言ですから。」

それはともかく、今回の行動は・・・」

「誘拐の件はともかく。」

今回の件はルークと第七音素の共鳴が起きてしまったために、疑似超振動が起きただけです。ファブレ公爵家によるマルクトへの敵対行動ではありません」

不機嫌な顔をしているルークの代わりに、ティアがそう言った。

まるでティアとの間で起きたのだと言わんばかりの微妙な説明だった。

「大佐。ティアの言う通りでしょう。彼に敵意は感じられません」

イオンはその説明を真に受けた形で納得したようで、ふてくされてそっぽを向いているルークを目で示しながら、イオンが取り成してきた。

「……まあ、そのようですね。温室育ちのようですから、世界情勢には疎いようですし」

ルークはその言葉に、またムツとして「けっ、馬鹿にしゃがってと呟いた。」

「ここはむしろ協力をお願いしませんか？」

イオンの言葉に、ジェイドはこう切り出した。

「我々はマルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下の勅命によって、キムラスカ王国へ向かっています」

「それは……まさか、宣戦布告？」「いや、それはなかつ。それならばイオン導師を引っ張ってくる必要はあるまい。」「違うか、なら何のために……」

「まあ、ありがちなのは導師のネームバリューを使おうというものだろうな。戦争回避のために宗教を使うというのはよくあることだ」

「じゃあ、和平交渉？ それにしては教団側の人間が少なすぎない？」

「それは……」

「あーもう！ハッキリしろ！」

無言で念話を交わしているティアとアーチャーの話聞いていて、ルークは状況も忘れて叫んだ。

「おや、見た目通り短気な方ですね」

さりげなく失礼なことを言うジエイドに、周りは思わず苦笑を浮かべた。

ヤレヤレといわんばかりの雰囲気アーチャーの方から漂ってきて、余計にむかついた。

「それはさておき、ぜひともあなたの力をお借りしたいのです。

平和のために。」

そう言っつて真剣な目でルークを見た。

「……しかし、いきなり手を貸してくれというのもおかしい話です。

こうしましょうか。これからあなた方を解放します。軍事機密に関わる場所以外は全て立ち入りを許可しましょう

まず私たちを知って下さい。その上で信じられると思えたら力を貸して欲しいのです。戦争を起こさせないために」

穏やかな声でそう言っつて、うかがうように黙り込んだ。

「……なんだよそれ」

か細い声で呟いた。

訳がわからなかった。戦争とか和平だとかそんな大事に巻き込まれるなんて、屋敷にいた時もあの森から今までの旅でも一度も想像していなかった。

「協力してほしいなら、詳しい話をしてくれればいいだろ」

「説明してなお、ご協力いただけない場合、あなた方を軟禁しなければなりません」

「何・・・！」

「ことは国家機密です。ですからその前に決心を促しているのですよ。」

「どうか宜しく願います」

ジェイドは宜しく願いますという感じのしない、胡散臭げな笑みを浮かべて部屋のノブに手をかけた。

「詳しい話はあなたの協力を取り付けてからになるでしょう。待っています」

ドアをくぐる前にそう言って部屋を立ち去った。

それについてイオンも部屋を出る。

アニスはそれについていくことなく、戸口に立ってにこやかな表情で二人を見ていた。

「ちっ、なんだよあいつ！むかつくな！」

『やれやれ、面倒なことになったな。どうする？』

『とりあえず、逃走経路の確認だけはしておいて。』

あまり力を使いたくないけど、力づくでっつことも考慮に入れなきゃいけないかしら』

「おい、無視すんなよ」

「ごめんごめん、で、どーする？」

「どーするつーたってわかんねーよ」

『やれやれ、我俣を言った拳句これか。これだからお坊ちゃまは』

アーチャーの言葉にムツとして口を開く前に、目で制して言葉を重ねた。

「『アーチャーは挑発しないの』」

そうね。私にはなんとも言えないわ。

こついつことはあなた自身で決めないといけないもの」

「はあ、めんどくせー」

そんな調子のルークに対してアーチャーは皮肉げに言い放った。

『貴様が変な寄り道を敢行せねば、こんな事態に陥らずにすんだかもな』

『それを言うなら、私にも責任があるわ。』

護衛を重視するなら、私情は排除するべきだったもの』

『だが・・・』

『あーうるさい。周りに人がいるんだからいいかげんにして。いいから、さっさと偵察してきなさい』

『・・・了解した』

アーチャーはしぶしぶといった感じで返事をする、音もなくその場から立ち去った。

念話をしている間、ティアは仔ライガに釘付けといった感じで籠の中を見ていた。人差し指を仔ライガの鼻先に突き出してくるくると円を書きながら、困った顔をしている。

それを盗み見しながら、ルークはため息をついた。

結局のところ、ティアは自分のことをどう思ってるのだろうか。

屋敷のやつらみたいに必要な以上に命令しないが、相手にもしない。アーチャーとばかり重要な話をして、俺のことはまるで眼中に無い感じだ。

エンゲーブの宿屋ではアーチャーに対して、もしもの時にはどうにかしてやると言い放ったが、実際のところ俺がいなくてもどうにかするんじゃないだろうか？

そんな後ろ向きなことを考えて頭がぐるぐるした。

思わず髪を掻き毟ったら、ミュウがおろおろしながら「ご主人様元気だすですの〜」と言って顔のそばに近づいてきたので、思わず驚づかみにして床に叩きつけてしまった。

ティアはそれを見て「ルーク怖いねー。らいらいは気をつけるんだよー」と気楽な調子で仔ライガに話しかけている。やっぱりどこか淡泊な反応で、言いよりの無いイライラを感じた。

そんな彼のことは気にもとめず、ティアは仔ライガから目を移して朗らかに提案する。

「ここであついても暗くなるだけだし、せつかく自由にしているって言うてきてるんだから船内を見て回らない??

私、こんな大きい乗り物に乗るの初めてなの!

せつかくだから見て回りたいわ」

そんな彼女の言葉に、戸口に立っていたアニスが小走りであつてきた。

「ルーク様!よかつたら私が案内します。いいですか?」

そのテンションに驚きつつ「別にいいけど」というと、一体何が嬉しいのか「ありがとございますっ」と身をかわいらしくよじつて答えた。

立ち上がって歩き出そうとしたとき、仔ライガが懸命に檻を叩いて出ようとしているのに気づいた。ルークはそれをしばし見つめていたが、檻から出して頭に載せた。

「さ、いきましょー」と引つ張られるに任せて船内へと歩き出した。

アニスはふつと足を止めて、どこか楽しげな様子のティアを上目づかいで見ると恐る恐るといった調子で「もしかして・・私がいたらお邪魔ですかあ?」などと尋ねてきた。

その質問に、ティアはよくわからないといった表情で首を傾げて、「タルタロスの中の話はわからないもの。案内してもらわないと逆に困るわ」と答えた。

アニスはそつと顔を伏せて、「天然?計算づく?手強い・・」と

呟いた。

しかし、すぐに何事もなかったかのように笑顔を浮かべた。

「それよりルーク様。タルタロスはどこに行きたいですかあ？」

ルークは困惑した顔で頭を掻こうとして、仔ライガが乗っているのに気づき、そのまま仔ライガの頭を撫でた。仔ライガはごろごろとのを鳴らしている。

「あ？ どこだったってなあ・・・。

俺この船のこと知らねーもんよ。ティアは？」

ミュウはそれを見てムツとして飛び掛ろうとしたが、その前にティアが持ち上げて頭に乗つけた。

「私だって同じよ。任せるわ」

アニスは一つ一つ丁寧に見学可能な場所を上げていく。

艦橋、休憩室、食堂、作戦会議室、寝室、機関室・・・。

ルークが望むような面白い場所などあるように見えなかった。

それでもやらないよりはましとばかりに、一つ一つ艦内を回っていく。

頭に小動物を乗っけながら歩く二人の後姿は、どこかほのぼのとした雰囲気を作り出していた。

第十章 未熟な答え

突き抜けるような青空の下で、陸上装甲艦タルタロスは草原を土煙を上げながら走り抜けていく。

ティアは栗色の髪をなびかせて、甲板の上から望む風景を見つめていた。

激しく吹きつける風を感じないかのごとく、微動だにせず視線は彼方の雲を追っていた。

広い空は自由を象徴するという。だが、その空の下にいたとしても自由だとは限らない。

ルークたちが騒ぐ声を漫然と聞きながら、無意識に自分の手の甲をさすった。

言いようの無い冷たいものを感じて、ぎゅっと手を握る。

これがある限り逃れられない。いや、無くなったとしても……。

彼女は耳を塞ぐように顔を伏せた。

楽しみにルークに話しかけるアニスや、少々情けない感じで話すミュウの声。

それに対して投げやりに答えながらも、どこか楽しげなルーク。生き生きとした活気がとても羨ましい。妬ましい。

……私も普通の女の子だったら!!

そんな慣れ親しんだ絶望をいつものように心の奥底に隠して、再び目をしっかりと見開いて自分の周りを観察し始めた。

自由に見てもいいと言った通り、特に厳重な警戒を受けることなく艦内を自由に歩き回ることができた。要所要所に立つ兵士達は油断なく警備を行い、錬度高さをうかがわせる。世界でも有数の最新鋭戦艦に最新の兵器。それに見合うだけの優秀な兵士達。

何よりこのトップの曲者さを見れば、攻略の難しさを思い知らされた。

『ティア』

自分のおかれている立場の困難さに、軽くうんざりしていると己の従者がすぐそばに立つのを感じた。

『どづかしら』

『一通りの脱出経路は確認した。逃げようと思えばたやすいだろう。だが・・・』

『ルークを連れてとなると厳しいでしょうね』

『そうだな』

『だからと言って、王族に連なるものを敵国の手に渡したままというわけにはいかないし・・・。面倒なことになったわ』

『しかし、仮にも平和の象徴とまで言われている導師イオンが乗っているのだ。』

『早々手荒な扱いはせんだろう。彼らに預けて我々は本来の目的に戻ったほうがいいのではないかね?』

.....。

顔をこわばらせて黙り込んだ。
彼の言っていることは正しい。正しいのだ。
でも、できるならもう少しだけ……。

「ティア？」

ぬっと赤い髪が視界に映った。
今にも暴れだしそうな顔をして、ティアを睨む。

「どーしたんだよ、変な顔して。」

呼んでんだから返事しろよ」

「え？あ、うん。ごめん聞いてなかったわ」

「ったく、どーしたんだよ。なんかまた面白いもん見つけたのか？」

「いえ、そういうわけじゃないけど……」

ティアの足元には仔ライガがまとわりつき、時々一定の方向を警戒する様子で見ている。チーグルの仔もすこし不安げにして二人の間を右往左往していた。

『それで、どうするのだ？マスター？』

姿は見えないままだが、きつと嫌みっただらしい表情をしてるだろ
うことは見なくてもわかる。反射的に罵ってやりたい気持ちが沸き
起こったが、ぐっと抑えて唸るよう黙り込んだ。

『やれやれ先が思いやられるな』

『・・・うるさい』

それを横で黙っていたルークは口をひん曲げて彼女の手を引つ張った。

「ほらとつとと行くぞ」

振り向かずにぐいぐいと、ティアの手を掴んで船室に続くドアを指して歩く。

「おやおやー。仲がよろしいようで」

「つく！強敵！・・・きゃわーん！ルーク様ー。アニスの手もひっぱってくださいー」

そんな彼女を見てジェイドはにこやかに彼らの仲をからかい、アニスはなにを思ったか対抗するように飛び掛ってきた。

それに驚いて仔ライガは走り回りミュウはあわてて周りをくると飛び回る。

ぎゃいぎゃいと騒ぐ彼らになぜか心が温かくなる気がした。

船室に戻って、ルークたちは黙って紅茶を飲んでいた。

ティアは冷えた身体が少しづつ温まってくるのを感じながら、すぐそばで丸くなった仔ライガを撫でていた。

先ほど兵士に頼んでいた、肉の蒸したものをたらふく食べて今はクフクフと寝息を立てている。

「よしっ、決めた」

と、先ほどまで黙って何かを考えていたルークが、よっと身体を起こして叫んだ。そして、近くで待機していた兵士に話しかける。

「おい」

「ジエイド大佐にお取次ぎいたしますか？」

「ああ、頼む」

「ルーク、決めたの？」

少々お待ちくださいと、部屋を去っていく兵士を見ながらティアはルークに声をかけてきた。

真剣なまなざしを向けられて、思わず目を背けてぶっきらぼうに答える。

「どっちにしたって、話聞かなきゃどうしようもないし」

「話を聞いたら本格的に巻き込まれることになるわ、それでもいいの？」

「うるせーな。それにどうせ今までも軟禁されてたんだ。バチカルまで連れてってくれるならどうでもいいや」

「どうでもいいって……！あなたそれ本気で言ってるの!？」

ルークは不満げな顔をして顔を背けた。

イオンは悪いやつじゃないし、あれほど嫌ってたマルクトのやつらもそれほど嫌な感じもしない。(ジエイドは除く)
今まで何もできなかった自分に、手を貸してほしいといわれたら悪い気はしない。平和のためにといわれたら特にだ。

それでも、実際のところは彼女達の手を煩わせるのが嫌になったのだ。

彼女らの振る舞いを見ていれば、断るなどと言ってしまえばこの艦全体を相手取ってでもルークの意思を尊重しかねない。

彼女にそんなことをさせたくなかった。

ティアはきつい目でルークを睨みつけた。

自分の役目と彼とを秤にかけて引き裂かれそうな思いをしていたのに、そんな適当な考えで答えを出すなんて。

こんなことなら、とっとと見捨てればよかった。

何でこんなやつのために悩んでたんだろう？

「信じらんない。ばつかじゃないの？」

「ばかっていうほうがばかなんだぞ！ばか！」

「ばか！ばかばか！」

「うるせーよばか！じゃあ、聞かないって言ったらどうするつもりだったんだよ」

「それは……。」 『あらゆる手段を使っても脱出させるわ、多少被害は出るでしょうけど……』 「」

「だから、それが嫌なんだって！」

「は？」

ルークは顔をほんのりと赤らめながらそんなことを口にした。

ティアはぼかんと口を開いて、そんな彼を見ていた。
はて、どういう意味だろう？ そんなに被害を出すのが嫌なのだろうか。

『ふん、彼はこれ以上ティアに迷惑をかけたくないということらしいぞ。』

それなら最初からもう少し気を使ってほしかったものだが。

まあ、気持ちにはわからんでもないな。

いかに世間知らずのお坊ちゃんといえども、私のマスターみたいな美女をこきつかっているのは気がとがめるだろう』

「え？」

「ば、ばか勘違いするなよ。」

別にお前が心配だからとかそういうわけじゃ・・・」

『やれやれ、いじつぱりもここまで来ると病気だな』

アーチャーは呆れた様子で笑った。

騒ぎに目を覚ました仔ライガが眠たげな目で二人を見ている。
のっそりと起き上がると、言い訳を探してオロオロしているルークの足元に近づいてきた。

そして、がぶりと足に噛み付いた。

大きな叫び声と慌てて走りよる音。

二人にしか聞こえない笑い声が船室に響いていた。

「いやー、お楽しみだったようですねー」

「ぜんぜん楽しくねーよ」

ジェイドのからかい交じりの言葉にルークは投げやりに答えた。
なぜだか、ティアはどこか心ここにあらずといった感じだ。

そんな二人を前にして、ジェイドはにこやかに二人を見渡した後
表情を改めた。メガネを軽く直して重い口調で言葉を続ける。

「昨今、マルクト・キムラスカを挟んだ国境付近で、局地的な小競
り合いが頻発しています。

恐らくは近いうちに大規模な戦争が始まるでしょう。
そこで、ピオニー陛下は平和条約締結を提案した親書を送ることに
したのです」

「僕は中立の立場から、使者として協力を要請されました」

イオンも補足するように続けた。

「それはイオン様の意思ですか、それとも教団の？」

イオンの言葉にティアはなにを思ったのか、量るような質問を投

げかけた。

「ごまかしは許さないといいた厳しい目でイオンを見ている。

「間違いなく私の意志です」

「それで、ローレイ教団は・・・？」

誇るように答える彼に確認するように質問を重ねると、「それは・
・」と困った様子で目をさまよわせた。

そのやり取りを興味深げに見ていたジェイドはかばうように口を開いた。

「嫌なところ突いてきますねー。確かに、教団の総意とは程遠いと言えます。」

現在ローレイ教団は、イオン様を中心とする改革的な導師派と、大詠師モースを中心とする保守的な大詠師派とで派閥抗争を繰り広げています」

「モースは戦争が起きるのを望んでいるんです。僕はマルクト軍の力を借りて、モースの軟禁から逃げ出してきました」

イオンの話にティアは驚きの声を上げた。

「そんな、大詠師モースが戦争を??」

モース様は預言の成就だけを祈っておられるはず・・・」

「ティアさんは大詠師派なんですね。ショックですう・・・」

アニスの言葉にティアは顔を歪めた。

「私は中立よ。どちらかに加担するなんてありえない」

「おや、妙な言い回しですね。ありえない・・・ですか」

ジェイドの指摘にティアは微妙に困った顔をして顔を背けた。

「おい、俺を置いてけぼりにして勝手に話を進めるな！」

「ああ、済みません。あなたは世界の何を何も知らない『おぼっちゃま』でしたねえ」

完全に話についていけないルークが怒りの声を上げると、ジェイドは肩をすくめた。

「ああ？なんだとう！？」

そんなルークをかまうことなく話は続く。

「教団の実情はともかくとして、僕らは親書をキムラスカへ運ばなければなりません」

イオンはとりなすように言うと、

「しかしながら、我々は敵国の兵士です。いくら和平の使者といっても、すんなりと国境を越えるのは難しい。ぐずぐずしては大陸詠師派の邪魔が入ります。その為に、あなたの力・・・いえ、地位が必要ですよ」

ジェイドはそれに続けて説明を重ねた。

「おいおい、おっさん。その言い方はねえだろ？ それに、人にものを頼むときは、頭下げるのが礼儀じゃねーの？」

「いいじゃない、わかりやすくて」

「あん？どーゆー意味だよ」

ティアのどこかポイントのずれた言葉にルークはきつとにらみつけた。

「そのままの意味ですけど？」

「馬鹿にしてんのか!？」

「いえ、そんなつもりは・・・」

「はいはい、痴話げんかは外でやってくださいね」

「「違う(います)!!！」」

「ったく、いったいなんなんだよ。……で？」

ドカツと座りなおして、偉そうにふんぞり返ってジェイドを見た。

「やれやれ」

ジェイドは肩をすくめた。

そして片膝をつき、貴人にする動作でうやうやしく礼をする。周りで引き止める声が上がったが、動じずに請う。

「どうか、お力をお貸してください。ルーク様」

「あんだ、プライドねえなあ」

「生憎と、この程度のことには腹を立てるような安っぽいプライドは持ち合わせていないものですから」

ルークの無神経な言葉にも大して動じずに、にこやかな笑みを浮かべた。

「分かったよ。伯父上に取り成せばいいんだな」

「ありがとうございます。私は仕事があるので失礼しますが、ルーク様はご自由に」

「呼び捨てでいいよ。キモイな」

「分かりました。ルーク様」

嫌みつたらしく答えてジェイドは船室から出て行った。

どこか悄然として、彼が出て行ったドアを見ているルークに「ご主人様元気だすですのー」とミュウが飛びついた。

むきになってルークがミュウを叩き落したり、それをティアが止めようとしたりするありさまをイオンは困った顔で見てた。

第十章 未熟な答え（後書き）

このテイアさんはとってもシビアな設定です。
ホントにかなり。いろいろと。

設定が公開されるのは先の話になります。

第十一章 襲撃

「つたく、いちいちうぜーんだよ」

赤い貴人と小動物の主従のあんまりなやり取りに、周りの人間が呆れ顔をしているのもかまわず、ルークは傲慢な態度を崩さなかつた。

思うがままにミュウの小さな頭をグリグリしたあとで、腕を組んでふんぞり返った。

主人の暴虐にも負けず、それでもミュウはルークのそばを離れない。

そんな彼らにイオンは困った顔をしていたが、落ち着いたのを見てルークに話しかけた。

「ルーク。和平への協力、感謝します」

「いいよ別に。それにしてもお前さ、こんな大変な役目があったつてのに何でエンゲープの騒ぎに首を突っ込んだんだ？」

「チーグル族は教団にとって聖獣ですから。

それにエンゲープで受け取るはずだった親書も届くのが遅れていましたし……」

「お前、人がいいな」

『ふん、お坊ちゃまに比べたら雲泥の差だな。導師のように心が広がって思いやりがあったなら、私もマスターも道中が楽であったらろ

うに』

アーチャーのあんまりな言葉に反論しようとしたが、周りに人がいるので反論できず、

「何だよその顔、俺が心が狭くてちっちゃいって言いたいのか！」

ティアに思いっきり八つ当たりしてしまった。

「え、ええー？」

びくつとして手をぶんぶんと振り、周りを見渡したとき懐から細長い小箱がこぼれ落ちた。

退屈そうに目を細めて周りをながめていた仔ライガは、ぴよんと飛び跳ねてティアが落とした小箱を啜えて走り出した。

あわててルークが捕まえようと飛びかかったが、腕を器用にすり抜けて縦横無尽に駆け回る。あつちでガッタン、こつちでバツタンとぶつかって、埃が舞うやら物が落ちるやら大騒ぎである。

「イオン様、これを・・・」

マルクト兵がノックと共にガチャッとドアを開けて入ってきた。そのまま、用件を話したそうとしたとき、仔ライガが兵士の足元をくぐって通路の向こうへと走り抜けていった。

ルークは大慌てで、退けるというのも惜しんで兵士を突き飛ばして仔ライガの後ろを追いかけていった。

「ありやりやー。いっちゃんいましたねー」

嘩然としたような面持ちでアニスが呟いた。
気を取り直したように姿勢を正して話す兵士の声が、静まりかえった船室に響いていた。

仔ライガは瞳をららんと輝かせて駆けていく。
軽い足音の後ろから、大きな足音が追いかけてくる。

ドアを挟んで向こうから、ジェイドが何かの書類の束を持ってやってきた。

大きな音を聞いて何事かと赤い目を向けて、こちらへ走りこんでくる仔ライガとルークへと嫌そうな顔と向けた。

仔ライガは彼を見るやカカカツと床に爪を立てて急旋回し、来た方向へと逃げ去っていった。

「いったいどうしたんですか」と言う暇もなく、ルークもまた来た方向へと走り去っていく。

「待てー。止まればー!!!」

「忙しい人たちですねえ」

ずれてしまったメガネを直して、何事もなかったのように当初の予定通りの目的地へとまた歩き出した。

「ルークはずいぶんとティアさんに気を許してるんですね」

ルークがいなくなった船室はどこか上滑りした雰囲気だったが、

それでも穏やかな会話が続けていた。

イオンのそんな言葉に、ティアはよくわからないといった表情で首をかしげた。

「そつでしようか」

「ええ、ずいぶんと気安い感じで」

「ティアさんってここに来るまで、ずっとお二人で旅をしていたんですよね。」

ルーク様って旅の間どんな風だったんですかあ？

あとあと、好きなものとか嫌いなものとか知りたいですー」

アニスのそんなことなく下心にあふれた質問に、とつとつと旅の思い出などを話し始めたとき空気を割るような警報音が響き渡った。

「敵襲!？」

ティアは厳しい目つきであたりを見渡すと、矢のように部屋から飛び出した。

イオンたちの引き止める声も聞かず、周りを見渡しながら走った先でジェイドが厳しい表情を浮かべ伝声管に何か呼びかけていた。

「艦橋! どうした?」

『前方20キロ地点上空にグリフィンの大集団です!』

総数は不明! 約十分後に接触します!

『……師団長、主砲一斉砲撃の許可を願います』

「艦長はキミだ。艦のことは一任する」

『了解！ 前方20キロに魔物の大群を確認。総員第一戦闘配備につけ！
つけ！』

繰り返す！ 総員第一戦闘配備につけ！』

あわただしく兵士達が駆けて行き、砲撃の音が外からもれ聞こえてくる。

そんな中でティアはあわてた表情でジェイドに走りよった。

「大佐！ ルークを見ませんでしたか？」

「ああ、先ほど見かけましたが……。戻ってきてないのですか？」

期待はずれの言葉に、ティアは顔を曇らせて考えこんだ。

「とりあえず、戦闘の邪魔です。船室に戻っててください」

「しかし……」

ためらいがちにうつむいたとき、激しい轟音と共に船体が揺れ動いた。

床が斜めに傾き、機関の音は薄れて聞こえなくなり、先ほどまで飛ぶように動いていた風景は変化するのをやめてしまっていた。

「どうした」

『グリフィンからライガが降下！』

艦体に張り付き攻撃を加えています！ 機関部が……。うわああ

!？」

ジェイドの問いかけに満足に答えることすらできずに声は途絶えて、悲鳴と騒音がわずかに聞こえてすぐに途切れた。

なおも呼びかけるが、雑音が聞こえるだけで返答が戻ってくることはなかった。伝声管を苦々しい顔で睨みつけ、騒ぎを聞きつけて駆け寄ってきたイオンとアニスを見た。

厳しい表情で彼らに何か言おうとしたとき、昇降口の方から黒衣を羽織った大男が兵士達を伴って入ってきた。

ジェイドはそれを見るや否や素早く譜術を放ち、兵士達は抵抗する術もなく跳ね飛ばされた。

しかし、黒衣の男はその手に持った大鎌をもって譜術の光を防ぎきりジェイドを見た。

強面の顔を歪めて、皮肉げに語りかける。

「流石だな。だが、ここからは少し大人しくしてもらおうか。

マルクト帝国軍第三師団師団長ジェイド・カーティス大佐。

・・・いや、『死霊使い（ネクロマンサー）ジェイド』」

ティアは構えた杖を思わず揺らがせて、ジェイドのほうを見たが歯をかみ締めて杖を握りなおした。

「これはこれは。私も随分と有名になったものですね」

「戦乱の度に骸を漁るお前の噂、世界にあまねく轟いているようだな」

「あなたほどではありませんよ。神託の盾騎士団六神将『黒獅子ラ
ルゴ』」

にらみ合う二人を横目に、ティアは懐から白い玉を取り出して口に含み飲み込んだ。白い手袋が薄く紅色に染まるのを確認する。

「フ……。いずれ手合わせしたいと思っていたが、残念ながら今はイオン様を貰い受けるのが先だ」

「イオン様を渡す訳にはいきませんね」

再び何かを取り出して構える。

「死霊使いジエイド。お前を自由にすると色々面倒なのでな」

「あなた一人で私を殺せるとでも？」

「お前の譜術を封じればな」

ラルゴが小さな小箱を取り出そうとした瞬間、ティアはキッと睨みつけて叫んだ。

「Lauf（走れ）」

青い輝きが走り小箱が弾き飛ばされた。

「Tanz（踊れ）」

光はそのまま壁にぶつかり分裂して、激しく跳ね回る。

ラルゴは飛んでくる光を鎌を持って振り払った。

光はなおも彼に飛びつこうとしていたが、すぐに力を弱めて床に落ちていった。

ジェイドは間髪いれずに譜術を打ち込み、ミュウに声を飛ばした。

「ミュウ！ 第五音素を天井に！ 早く！」

「は、はいですの」

あっけに取られた表情でその光景を見ていたチーグルの仔は、あわてて飛び出して天井の音素灯めがけて炎を吐きつけた。

過剰な音素を吸収した譜石はまるで爆発したかのように光を放った。

「今です！ アニス！ イオン様を！」

「はいっ！」

強烈な光に目を焼かれてラルゴがひるんだ隙に、アニスはイオンの手を引いてラルゴの横をすり抜け、昇降口のほうへと駆け出した。

「落ち合う場所は分かりますね！」

「大丈夫っ！」

ジェイドの言葉にアニスは強い口調で答えて走り抜けていった。

「させるか！」

追おうとしたラルゴにティアは眠りの譜術を唱えて、その隙を逃さず懐に潜りこみ槍を突き刺した。

血だまりに沈むラルゴを見やり、ジェイドはメガネを直してティアに向き直った。

「イオン様はアニスに任せて、我々は艦橋を奪還しましょう。」

ルークがいれば少しは心強いのですが・・・、無いものねだりをしても仕方ありませんね」

「ルーク・・・」

そして、いくつ言葉を変わして彼らは艦橋へと急ぐことにした。

ティアは走り出そうとしてすぐにミュウに気づき、すぐそばに駆け寄って手を差し出した。手袋はすでに白く、先ほどの名残を探すことも難しい。

ミュウはその手を不安げな表情で見た。

悲しげな目でミュウを見やり、安心させるように笑った。

「ごめんなさいね。少しだけ我慢して」

「みゆみゆ。どーってことないですよ。ティアさんは優しい人です」

そういつて、素早く手を伝って肩に乗った。

ティアは何かを我慢するかのように黙り込んだが、すぐに気を取り直してジェイドの後を追いかけて行った。

アーチャーは霊体化したまま、ルークを探して船内を走りまわっていた。

分かれて行動することに多少の不安は残ったが、ティアの強い命

令を受けてしぶしぶ探しに行くことになった。

さらに言つと、「あなたのマスターを信用して」とまで言われれば、サーヴァントとして拒否できない。

と、素早く実体化して手にした剣を投げ放ち、それはルークに向かって剣を振り上げた兵士の額に突き刺さった。

そして、素早く床を蹴って驚いて座り込んだルークの前に立った。

「・・・アーチャー」

引きつった表情のルークに皮肉っぽい笑みを浮かべ、下がってる言い放つて明らかにマルクト兵とは違う鎧をつけた兵士達に向かっていた。

あつという間に兵士達を切り伏せて、鋭い目を通路の向こうへと送った。

「こ、ころした・・・？」

ルークは立ち上がることもできず、怯えた顔で床に広がっている血だまりを見ていた。

襲い掛かってくる兵士達、血の池に倒れ伏してしまった兵士達、あまりの衝撃に頭が真っ白になってしまっている。

突然、譜術の詠唱と共に氷の刃が降りかかって、身動きができないままのルークに襲い掛かった。

素早くアーチャーが二本の刃で防ぎきり、射抜くように睨み付けた。

「きさま・・・」

「情けない奴。それが怖いのなら剣なんか捨てちまいな」

彼はどこかで見たような顔を歪めてあざ笑った。

ルークは唾を飲み込み立ち上がり、剣を構えた。

足元で仔ライガが毛を逆立てて唸り声を上げている。

違和感と不快感、その存在を許してはならないと何かの奥底で叫ぶ。

吐き気をこらえてその顔をにらみつけようとしたが、視界がぶれてはつきりしない。何かの割り込んでくるような気がする。

「ルーク」

アーチャーは剣を構えて、戸惑うルークを見ずに声をかけた。

「艦橋に行け。マスターたちが奪還に向かっている」

「で、でも」

「いいから、行け!!」

弾かれたようにルークは走り出した。

仔ライガもあわてて追いかけていく。

それさえも確認せずに、アーチャーは敵をにらみつけていた。

敵はそれを黙って見ていたが、ため息をついて剣を収めた。

「なんのつもりだ？」

「それよりいいのか？放っておいたらあのへっぴり腰だ、あつとい

う間に串刺しになるぞ」

「ふん、その時はその時だ。サーヴァントの仕事は子どもの子守ではない」

「は、それはそうだ。だが残念だ、今回はお休みだよ」

「ほう？」

「こちらにも予定というものがある。悪いがここは退散させてもらおう」

「させると思うか？」

「思うとも、それにマスターを放っておいていいのか？」

だまりこんだアーチャーを見て笑い、背を向けて歩き出す。

「またいずれ・・・な」

「ああ、その時は必ず」

鋼色の瞳でその姿を刻み込むように睨み付けると、ルークが走り去った道を駆けていった。

足音が去っていくのを聞いて、血にまみれた床を立ち止まり振り向いた。

すでに生きている者はすでにおらず、そこには死体だけ転がっている。

しばしまつてそれを見ていたが、何事もなかったかのように歩
き去った。

彼の赤い髪はまるで血の雨のようだった。

第十二章 骸狩り

音素灯が薄暗い廊下を照らしている。

所々に血しぶきが撒き散らされて、担い手のいない剣が血に塗れたままに床へと突き刺さっている。

ルークは敵の目を掻い潜って、吐き気と頭痛に身を悩ませながらも積荷の影へと身体を滑り込ませた。

壁に手を突いて、力なくずるずると座り込んだ。

「・・・いつたいなんだってんだ」

生臭い血の匂いが鼻について、息をするたびに吐き気がこみ上げてくる。

仔ライガは心配げな顔をして前足を膝に乗せ、ルークの顔を見上げた。

そして、黒く濡れた鼻を近づけて顔をひっきりなしに舐める。

払いよけるのも億劫で、仔ライガのするがままに任せて力なく手を握る。

気づけば涙が流れていた。情けなくて余計に涙があふれそうだった。

涙を拭うように頬を舐めていた仔ライガをぎゅっと抱きしめて、さきほど相対した男のことを考えた。だが、深く考えようとするとたびに思考は曇って、支離滅裂な映像が代わりに頭に流れて、考えが少しもまとまらない。

絶え間ない苦痛にうめいて、すがりつくように抱きしめる腕を強める。

仔ライガは小さく鳴いて身体をひねってルークの腕の中から抜け出した。

「あ、わりい……」

いつもの傲慢さは息を潜め、弱々しく謝って怯えるように周りを見渡した。

アーチャーは艦橋に行けと言っていたが、あちこちに兵士や魔物がうろついており、戦わずには目的地に行くことはできないだろう。今までの旅とはまったく異なる戦い。いや、殺し合い？

狂気じみた顔で襲い掛かる兵士達に、血を撒き散らして絶命する兵士達……。

身を震わせて自身の身体を抱きしめた。

「ルーク」

びくつと身体を震わせて見上げると、アーチャーがルークを見下ろしていた。

彼の赤い外套がまるで血のように見えて、ルークはまるで後ずさるようにして彼を見上げた。

アーチャーはそれに気づかない振りをして、冷静な声で言葉を紡いだ。

「敵は船内をほぼ征圧しているようだな。」

ふむ、ここはまっすぐにマスターたちと合流するほうがいいだろう

そしてルークをちらつと見て、挑発するように言い放った。

「やれやれ、これまでの旅で少しはましになったと思っていたが勘違いだったようだな。なに、マスターに坊やのことを頼まれてる。」

まあ、せいぜい邪魔にならないように後ろに隠れてる」

ルークは反発するように顔を上げたが、すぐにうつむいてしまった。

アーチャーはそんなルークに声を和らげて、安心させるように頭を叩いた。

「初めて戦場に放り込まれれば、誰だってひるむものだよ。」

こんな異常な状況で怯えないやつは、生まれつきの戦闘狂か感情をどこかに忘れてきた異常者だけだ。

「気にするなどは言わないが無理しなくていい」

ルークは顔を赤く染めてうるさげにアーチャーの手を払い、ツンと顔を背けて腕を組み平気な顔を取り繕った。

「べ、べつにお前に心配されるようなことじゃねーよ」

「ならばいいのだがな」

苦笑を浮かべて周囲を見回しているアーチャーに、ルークはおずおずといった様子で問いかけてきた。

「お、お前は平気なのか？」

「ふん、元来サーヴァントはその為のものだ。」

お坊ちゃんなんぞを守るのは本意ではないが、マスターの頼みだ、おこぼれ程度には守ってやる」

「なんだよそれ、だいたいサーヴァントって何だよ」

「それはお前が知るべきことではないな」

「はあ！？　なんでだよ」

赤い騎士はため息をついて不満げな子どもを射抜くように見た。視線に怯んで黙り込むルークに呆れたように鼻で笑った。

「聞いてどうする？」

「ど、どうするって・・・」

「自分の身も満足に守れない奴が、余計な厄介ごとに首を突っ込むものではないな。」

好奇心は身を滅ぼす。大人しく守られてる」

「でも！」

「ただでさえ和平条約なんぞという厄介ごとを抱えてるのだぞ？」

それさえも暗礁に乗り上げているのに、こちらの事情に首を突っ込む余裕があるのか？　あるはずがなかるう？」

言い含めるようなアーチャの言葉に不満げな顔で黙り込み、心細げにすがりつく仔ライガを撫でた。

それでも知りたそうな顔をしていたが、気づかぬ振りをして回りを見渡した。

「それだけ関係の無い話に気を回せるのなら、もう大丈夫だろう。いくらマスターと言えど、この状態では厳しいだろうな。」

早くマスターたちと合流しなければ。そろそろ行くぞ、坊ちゃん」

「坊ちゃんって言うな！　この陰険白髪親父！」

「ああ、これはすまない。何せまだ名前を覚えてもらっていないからな」

「ルーク！ルーク・フォン・ファブレだ！ ルークって呼べ！」

「そうか。短い間だがよろしく、ルーク」

思いのほか穏やかな笑みを浮かべる彼に、ルークは目をさまよわせてうなずいた。

ティアはジェイドに先導されて艦橋へと向かっていた。

タルタロスはいつの間にか動き出して、艦橋がすでに制圧されていることがうかがえた。

ジェイドは不審げに窓の向こうを眺め眉をひそめた。

「一体どこへ……」

「タルタロスをどうするつもりなのでしょうっか」

「さて、マルクト軍の最新艦など手元にあつたら、ややこしい事になると思つんですがねえ」

ぼそぼそと言葉を交わしていると、やがて動きが止まり誰かが船外へと出てくるのが見えた。

「あれは……」

「イオン様？」

オラクル兵に連れられて、イオンが歩いていくのが確認できた。

「アニスは？」

「まあ、アニスなら大丈夫でしょう。しかし、彼をそのままにしておくわけにもして置けません。どうにかして取り戻さなくては」

「しかし、どうやって？」

「まあ、とりあえずは情報収集ですかね」

彼らは顔を突き合わせてあれこれと相談した後、目的のために行動を開始した。

いろいろと荒っぽい手段を使うなどして、情報収集したところによるとイオンはタルタロスに戻ってくるという。

そこであれこれと下準備をした上で、待ち伏せして救出することとなった。

アーチャーの赤い背中を追いかけて、ルークはタルタロスの通路を走っていた。これは自分の仕事だと胸を張っていただけあって、道々に立ちふさがる兵士達を一瞬のうちに打ち倒していった。

倒れた兵士達を素早く縛り猿轡を噛ませて、部屋の隅に放り込んで進んでいく。視界に入ることなく声も上げさせることもなく、兵士達を無力化していくアーチャーの手腕にルークは驚きを隠せなかった。

最初、兵士達が襲ってきたときにはまた死人が出るのかと不安に

思ったのだが、アーチャーはルークのほうをちらつと見たあと殺すことなく兵士達を鎮圧していったのだった。

そうやって船内を駆けていたとき、突然すべての照明が落ちて通路に隔壁が下りてきた。薄く響いていた機関音も消えていく。

「なんだ？」

「ふむ、なるほどな」

「な、なんかわかったのか？」

「そうとわかればモタモタしてられんな。急ぐぞ」

「え？だからな・・・のわー！！」

アーチャーはルークと仔ライガを軽々と抱えると、おもむろに窓をぶち破って壁を駆け上がった。あまりの急展開についていけず、ただ目を回すばかりだった。

あつという間に船の最上部にまで駆け上がり、帆柱のすぐそばで下ろされた。

「な、何しやがるんだ！」

「まあ落ち着け」

「落ち着けるか！ ばかやろう！」

アーチャーは足に噛み付く仔ライガを宥めながら、下のほうを指差した。

「導師が捕まったらしくてな、マスターたちが奪還に動いてる。ふむ、来るぞ」

停止したタルタロスに向かって、金髪の女がイオンを連れて歩いてきた。

「イオン！」

思わず飛び出そうとするルークの襟首をぐいっとひっぱった。

「なにするんだよ！」

「まだ早い、すこし待て」

ルークは苛立たしげにアーチャーをにらみつけたあと、イオンを心配げにじっと見つめていた。

左舷昇降口にてティアたちはイオンたちが現れるのを小窓から監視していた。

目論見どおりに彼らが誘導されていることに安堵しつつ、息を潜めてチャンスを待つ。

扉が左右に開いた瞬間、ミュウは巨大な炎を吹き出して油断していた兵士はそのまま階段の下へと落ちていった。

異変に気づき、金髪の女は銃を構えるがそれを待たずしてジェイドが飛び掛った。幾度かやり合った末に、ジェイドが女の背後を取り槍をのどに突きつけて動きを止めた。

ティアもミュウと組んで兵士達を相手に大立ち回りを繰り広げていた。ミュウが大きな炎で目くらましをして、それに怯んだ隙にティアが杖を打ち据えて兵士達を気絶させる。

「さすが、ジェイド・カーティス。侮れないな。」

「お褒めいただいて光栄ですね。さあ、武器を棄てなさい」

女は憎々しげな表情を浮かべ、手に持つ二挺の譜銃を地面に放り投げた。

「ティア、譜歌を！」

槍を突きつけたままジェイドはティアに声をかけた。

「・・・ティアだと？」

女はジェイドの言葉を聴いて、訝しげな表情を浮かべた。

ティアは冷たい目で女を見やり譜歌を発動させようとしたが、ほんの一瞬苦悶の表情を浮かべ杖を落とした。

「ティア？」

その瞬間、隔壁を突き破って一頭のライガが現れた。

ティアは素早く体制を建て直し、ライガの雷撃を避けて飛び退った。

女はそのチャンスを見逃さずにジェイドの槍から逃れて、イオンを人質にして二人をけん制する。

「アリエッタ！ タルタロスはどうなった？」

ライガを引き連れて一人の少女が船の中から現れた。
不安げに身を縮ませたままぬいぐるみを抱きしめて、ぼそぼそと
言葉を紡ぐ。

「制御不能のまま……。」

このコが隔壁、引き裂いてくれて、ここまで来れた……。」

女は銃を構えたまま言葉を続けようとしたとき、

「どりゃー……！！！」

頭上からルークが飛び降りてきた。

驚き目を見開いた瞬間にルークは女を打ち倒し、イオンを奪い取
って素早く走り抜けた。女が素早く体勢を立て直して譜銃を撃つが、
ルークは素早い動きでそれを避けていく。

いつの間にか目を覚ました兵士達は、あわてて剣を構えてティア
に襲い掛かった。しかし、上空から兵士達の腕に矢のようなものが
突き刺さり、苦悶の声を上げて転がる。

ジェイドは素早く少女の背後に回ると羽交い絞めにして槍をのど
にあてた。

「アリエッタ！」

「さあ、もう一度武器を棄てて、タルタロスの中へ戻ってもらいま

しょうか
「くっ」

女は忌々しげにジェイドをにらむと、キッとティアを見て叫んだ。

「ティア・グランツ！ どういうつもりだ！ 何故ここにいる！
ヴァン謡将は・・・」

「あなたには関係ありません！！」

「なんだと！？」

ティアの言葉に女は顔色を変えたが、ジェイドが再び脅迫の言葉を吐いたことで苛立たしげに武器を捨てた。

そして、女と兵士達はタルタロスの中に戻っていった。

「さあ、次はあなたです。魔物を連れてタルタロスへ」

ジェイドは自分が捕らえている少女に対して促すと、少女は悲しげにイオンを見てぼつぼつと何かを訴えようとした。

しかし、イオンはそれに答えることなくタルタロスに戻るよう促し、少女は名残惜しげに振り返りながらタルタロスへと去っていった。

そのあと、外側から全ての昇降口を封鎖して彼らは軽く安堵の息をついた。

「これでしばらくは開かないはずだ」

彼らを見回してジェイドはそう言って、再びじつとルークを見て笑った。

「いやー、ずいぶんいいタイミングで落ちてきましたねー」

「ご主人様かつこよかったですのー!!」

「お、おう」

戸惑い気味に顔を背けて、はたっと気がついたように背中から仔ライガを引き出した。今までの苦勞も知らないで、のんきに大あくびをしている。

ティアは苦笑を浮かべてルークを見ていたが、背中にくつきりと足跡がついてるのに気がついて目を軽く見開いた。

さり気ない調子で近づき、力いっぱい何度も背中を叩いてごまかすように話しかける。

「あなたね、こんなときに一体なにしてたのよ。心配したのよ!」

「いて、いて! なにしゃがる!」

「はいはい、じゃれあうのはほどほどにしてくださいね。

ところでイオン様。アニスはどうしましたか?」

「敵に奪われた親書を取り返そうとして魔物に船窓から吹き飛ばされて……」

「ただ、遺体が見つからないと話しているのを聞いたので、無事でいてくれると……」

「それならセントビナーへ向かきましょう。アニスとの合流先です」

「セントビナー？」

ルークは聞き覚えの無い名前をジェイドが口にしたのを聞いて言葉返す。

「ここから東南にある街ですよ」

「分かった。そこまで逃げればいいんだな」

イオンの言葉に納得したようにうなずいた。

「……ところで、あなたの他に上に誰かいませんか？」

ジェイドは注意深げに視線をやり、ルークに問いかけた。

「え、ええと？……俺のほかには居なかったぞ？」

「ふうーん？……まあいいでしょう」

じつとルークたちを観察したままそう言つと、場を切り替えるように言葉を続けた。

「そろそろいきましようか。いつまでもここに居ては危険です」

「……お前の部下はいいのか？」

ルークが戸惑い気味に聞くと、表情を消して冷淡に答えた。

「生き残りがいるとは思えません。」

証人を残しては、ローレライ教団とマルクトの間で紛争になりま
すから」

「・・・何人、艦に乗ってたんだ？」

「今回の任務は極秘でしたから、常時の半数　百四十名ほどです
ね」

うなだれるようにうつむき黙り込むルークに、ティアは心配げな
顔を浮かべていた。ミュウと仔ライガもルークを見上げている。

「いきましょう、ここで立ち止まるわけにはいかない」

ジェイドはそう言って、後ろを振り向かず歩き出した。

ルークは苦痛に似た表情を浮かべて静まり返った艦を見つめ、ジ
ェイドたちの後ろについてセントビナーへと歩き出した。

第十二章 骸狩り（後書き）

ガイの代わりにルークを華麗に参上させて見た。
いろいろとごめんなさい。

第十三章 汚れた手

タルタロスでの出来事は一行に深く影を落とし、明るく話をする雰囲気でもなく、街へと続くであろう道を歩いていた。

ルークは黙々と足を進めながら、タルタロスに乗ってからこれまで起きた出来事を思い起こしていた。

マルクト兵に引つ立てられてジェイドにネチネチと取調べをうけたこと。戦争を防ぐために協力を求められたこと。魔物やどこかの兵士達に襲われたこと。死んでいった兵士達。それに、あの赤い髪の毛……。

「……っ」

ルークは軽い頭痛に顔をしかめた。

男のことを考えようとすると何故か頭が痛くなるのだ。だがそれも、考えることをやめられず痛みをこらえて思い出そうとしていた。思い起こそうとすればするたびに少しずつ焦点が定まり、違和感がはつきりとしてくるようだ。

そうだ、あの男は赤い髪に深い翡翠の瞳を持っていた。（この髪と瞳の色は王族の象徴で……）どこかで見たような気がする。（いつも見ていた。この色は誇りで……）そうだ、鏡を見ているようにそっくりだった。（当たり前だ、あれは……）

怯えている姿を馬鹿にされた。（当然の反応だよな）軽蔑したような冷たい目で目。（すでにこの手は……）

「ご主人様大丈夫ですか？」

ミュウが下から見上げるようにして、心配げにルークを見つめて

いた。

ちょこまかと目の前を歩き、その大きな頭は今にも転がりそうな不安感がある。

ルークはムカツと来て、闇雲に怒鳴り散らした。

「うるせーんだよ、このブタザル！黙って歩いてる！」

「ルーク」

ティアは目をひそめて、ミュウをかばうように近くに歩み寄った。

「そんな言い方はだめよ。ちゃんとミュウにはミュウっていう立派な名前があるんだから」

「こんな奴、ブタザルで十分だね」

すねたようにルークはそんな風に言い張って、つーんと顔を背けた。

「ルークー!!」

「みゅみゅ」。ケンカしちゃだめですのー」

「うっせー!!」

「まあまあ、ルーク落ち着いて」

イオンは困った顔をして、ルークを宥める。

そんな騒ぎも長く続くでもなく、気がつけばティアは色彩の無い

顔で黙り込みルークもまた文句を言い続けることもなく黙って歩いていった。

そんな様子をイオンは困惑した表情で見ていたが、だんだんと歩みを遅らせて突然崩れるようにしやがみこんだ。

「イオン？」

ルークはあわててそばに駆け寄り顔をのぞきこんだ。

顔は真っ青で冷や汗をダラダラと流している。

ティアは少しオロオロしたあと、イオンのそばに駆け寄ってしやがみこんだ。

ジェイドは冷静にそのありさまを見つめて、イオンに話しかけた。

「イオン様。タルタロスでダアト式譜術を使いましたね？」

ルークはジェイドの言葉を聞いて、どっかで聞いたことあるなあ」と額にしわを寄せて少しだけ考え込み、ぽんつと手を打った。

「ダアト式譜術って、チーグルのトコで使ってたアレか？」

イオンは本当に申し訳なさそうに息を整えながら答えた。

「すみません。僕の身体はダアト式譜術を使うようには出来ていないくて……。ずいぶん時間も経っているし、回復したと思ってたんですけど」

ジェイドは少し眉をひそめて黙ったあと、ため息をついて周りを見回して休憩場所によさそうな木陰へと足を進めながら言った。

「少し休憩しましょう。このままではイオン様の寿命を縮めかねません」

水色の耳がひよこひよここと揺れている。

あっちへこっちへと楽しげに飛び跳ねながら、ルークたちの周りを行ったり来たりといそがしい。

仔ライガはミュウの後ろを軽く飛び掛るように追いかけて、落ちて着く気配はまったくない。

ルークはだるそうに足を組んで頬杖をついて、そんな彼らを眺めていた。

チラッと、横目でイオンを見ると彼はそんなミュウたちの様子を穏やかな表情で見つめていた。

先ほどよりはだいぶ顔色はよくなっており、ルークはわずかにホツとした表情を浮かべた。

その横ではティアが静かに身体を休めていた。特に何をすることもなく黙ってその場に座り込んでいる。周りを警戒するように辺りを見回していたが、目は時折ミュウたちの方へと吸い込まれていた。

ジェイドは特に疲れた様子もなくその場に立ち、周囲への監視を怠らない。

息を切らせて駆け寄ってきた仔ライガをなでて、ハタツと思い出したように懐をまさぐった。

「ティア、これ!!」

タルタロスで、仔ライガがティアから掠め取っていった小箱をさ

つと手渡した。複雑な幾何学模様が描かれた小箱は、仔ライガが啜えていたにしては傷の一つも見当たらなかった。

ティアは嬉しげに頬を緩ませて手に取った小箱を開けて中身を確認した。

その箱には金色の櫛が一本だけ入っていた。それを手にとってほつと息をつくとすぐに丁寧に小箱にしまった。

「おや、それは響律符キャハンティコラですか？」

「え、ええ。まあ……」

ジェイドの問いにあいまいな返事をしてさっさと懐へとしまいこむ。

「響律符……？　なんだそりゃ」

横で聞いていたルークは首を傾げて聞いてきた。

イオンは不審げな顔をして「知らないのですか？」とルークを見ただ。

ティアは特にこだわる様子もなく、「わるかったな」とすねた顔をしているルークに説明する。

「譜術を施した装飾具のようなものよ。譜の内容に応じて譜力や身体能力が向上したり、時には特殊な技能を覚えられることもあるわ。譜力の弱い響律符なんかはアクセサリーとして使われていたりするわね」

「へえー」

ルークは感心したように相槌を打ち、興味深げにティアを見た。

「ミュウのつけているソーサリーリングも響律符の一種なんですよ」

「はいですのー」

イオンの言葉に誇らしげにミュウは胸を張った。

「このソーサリーリングのおかげで、子供のミュウでも炎が吐けるんですの！」

それに幾ら炎を吐いても疲れないですの」

そう言ってミュウはポオーっと炎の塊を吹いた。

「うお、びっくりしたー！・・・すげえな響律符って」

キラキラした目をミュウのソーサリーリングに向けて、ルークは驚嘆の声を上げる。ミュウは嬉しげにリングを持ち上げて、絶え間なく炎を吹き付けた。

イオンはそんなルークをにこやかに見つめていたが、ルークがミュウのソーサリーリングを物欲しそうに見つめているのに気がついて、あわてて声をかけた。

「ル、ルーク。これをあなたに」

炎をかたどった青白いブローチをルークに手渡す。

その後ろでは仔ライガが身を隠してミュウに狙いをつけている。

「これが響律符？」

手の中にあるブローチを日にかざして、興味深げに観察した。そして、襟元にピンを刺して身に飾りつけてイオンを振り返った。横でミュウが火を吹き疲れて息をついた瞬間、仔ライガはここぞとばかりに飛び掛った。ミュウは潰されて目を回している。

「似合うか？」

「ええ、とつても」

イオンは穏やかな表情でルークに笑顔を返した。

二人がニコニコと笑顔を交わしている横では、ティアは潰されているミュウを助け出していた。仔ライガは不満げな顔をしていたが諦めて、すぐ横で寝転がった。

「そうか。なあ、もしかして俺もイオンが使ってた、だ、だーと式譜術？つてやつ使えるようになるのか？」

「そ、それは・・・すみません。ダアト式譜術はローレイ教団の導師にしか使えないんです」

「なんだ、つまんねえな」

ルークは面白くなさそうに唇をとがらせた。

そんな会話を横目に、ティアはミュウの耳を軽くもてあそびながら遠くを見ていた。

タルタロスはすでに遙かに遠くて肉眼では確認することはできない。

普段であれば魔力で視力を強化して、様子をつかがうこともできるのだが先ほどの戦闘でかなり力を消費してしまっている。

先行きの暗さにため息しか出てこなかった。

『・・・タルタロスでの顛末はこんなものだな』

アーチャーの報告にさらに気分が重くなった。

ティアにとってこの旅はささやかな息抜きのようなものだった。

自分の役割を忘れたわけではないが、それでもルークを送り届けることはそのためのなるのだからと、気がつけば自分をこまかして楽しんでいた。

それなのに・・・。運命は現実逃避さえ許さないらしい。

『ふん、召喚陣にわざわざ落ちてきたのだ。関係ないというほうがおかしい話だろうな』

『ただの偶然だって可能性も十分あるわ。こんな記録にも無いこと、何が起こったっておかしくないもの』

『ティア』

『・・・わかってるわよ。現実を見るっていうんでしょ？』

『わかっているならいいが』

ため息を飲み込んでルークたちを見た。

いつの間にか手から抜け出したミュウがルークに話しかけてうざがられている。それをイオンが困った顔で見ている。

ジェイドは……こちらをじつと見ている。
微笑みを貼り付けて冷たい目でこちらを観察していた。
思わず冷や汗をかきながら、そっと目をそらした。

『ティア』

『なに？』

『敵が来ている』

その言葉にティアは眉をひそめた。

まだ本調子じゃないのに！

『あなたの方でどうにかできないかしら』

『やめておけ。これ以上の魔力の消費は致命的だぞ？』

きつく唇を噛み黙り込んだ。

やがて遠くから金属の打ち付けるような音が近づいてくる。重装備の兵士達が足音荒々しく、こちらを見るや剣を抜き放ちイオン様を渡せと駆け寄ってくる。

「やれやれ、仕事熱心な人たちですねえ」

ジェイドは苦笑気味にメガネを押さえて手を開くと、にじむように音素の光がもれて槍が現れた。ぶんと振って槍を構える。

ルークもあわてて剣を抜いて剣を構えた。

手に汗がにじみ心臓がバクバクしている。
横を見れば、ティアが冷静な表情で敵を見据えていた。

「ルーク、イオン様をお願い」

そう言い放つと、ティアはルークの前に立ち杖を構えた。

それからは一方的な虐殺だった。

ティアが敵の動きを封じ、ジェイドが強力な譜術でなぎ払う。

ルークはその脇で射程範囲から逸れた敵を相手取り、妙によく動く身体を持て余していた。

敵はすでに半分を切り、ジェイドは余裕さえ感じられる槍さばきで敵をはね飛ばし地面へと沈めていった。

次々とその数を減らし、それでも敵の闘志は萎えずこちらへと襲い掛かる。

その様相にルークは恐怖を感じずにはいらなかった。

乱暴に襲いかかる敵を殴りつけて沈め、周りを見渡したとき、

「ティア！」

手に持っていたダガーを取り落とし、膝をつくティアを見た。

敵は剣を振り上げて、鋼の剣が日の光をはね返して禍々しく輝いた。

何も考えられず、切り結んでいた敵を無造作に殴り倒すと、ティアに向かって走り出した。

ルークの剣がまっすぐに敵の胸に向かって伸びる。剣の先がゆっ

くりと胸に飲み込まれていくのをルークは見た。

生々しい触感と絶望にゆがむ敵の顔。

無意識の内に剣を引き抜きながら、身体が震えるのを押さえ切れなかった。

「あ、あ……。お、俺が殺した……。？」

『ルーク、泣き言を言うのは後にしろ。敵に仲良く輪切りにされなくなかったら、とつと剣を振れ』

敵のど真ん中で立ちすくむルークにアーチャーからの念話が届いた。

むっとして涙目になりながらも、なおも襲いかかってくる敵の刃を弾き返した。

敵を殲滅したあと、一行は追っ手を警戒して早々にその場を後にした。

それからしばらくの間、彼らは暗い雰囲気を背負いつつも街を指して歩いていた。

無言でルークは一行の後ろを歩いている。時々、後ろを振り返って暗い表情をさらに暗くして足を進めていた。

ティアとイオンは心配げにルークを見ていたが、声をかけられずにいる。

前を歩くジエイドはそんな暗い雰囲気に引きずられることなく、飄々とした顔をしていた。

それでも、雰囲気の暗さにうんざりしたのかそれともまた別の要因か、立ち止まると早めに野営の準備をすることを提案してきた。

「今日はここら辺で野営にしましょうか。
みなさんもかなりお疲れのようですね」

「そ、そうですね。ルークもティアさんもお疲れでしょう?」

イオンはルークをちらちらと見ながらそんなことをいう。

妙に気を使われていることにイラついたが、反発する気も起きず
ため息をついて「わかったよ」と答えたのだった。

第十四章 選択

夜の闇に火の粉が舞い踊る。

積み上げた薪は炎の熱に裂かれて崩れ落ち、乾いた音が耳に響いた。

ジエイドは何を話すでもなく、腕を組んで無言で炎を見つめていた。

すでにルークもイオンも眠りについて、穏やかな寝息が微かに聞こえている。

わずかに口元に笑みを浮かべ何気なくすぐそばを見た。

そこにはティアが憂いをおびた瞳を炎に向けて、長い髪を櫛で梳いていた。

明るい栗色の髪もいまは薄暗い影に染まり、金色の櫛が光を弾いてきらめいている。

「その響律符は……いえ、それはホントに響律符なんですか？」

疑わしげな目をティアに向けて、観察するように彼女を見る。

「……それ以外の何に見えますか？」

「いえ、響律符にしては音素の動きが奇妙ですね」

「そうですか……。死霊使いの目を引いたとなれば、これを作った人も鼻が高いでしょう」

ジエイドの方を見ることもなく、淡々と手を動かしていた。

なんでもないことのように答えているが、表情はわずかに硬く炎

を見る瞳もどこか冷たい。

まるでそれに気づいていないかのような様子で言葉を重ねる。

「ええ、興味深い。是非とも作った人に会ってみたいですねえ」

その言葉に答えずに彼女は髪を梳いていたが、その手を止めて髪
の毛を摘み何かを確認するかのようじつと見た。手を離すとさら
さらと零れ落ちる。

ため息をついて櫛を片付けようとしたとき、

「変わった譜術といいその奇妙な響律符といい、あなたは一体何者
なんですかねえ？」

「ちよつと変わった術を使う、ただのオラクル兵ですよ？」

おどけたように口元に笑みを寄せ、小箱へと櫛を片付けながら、
そんな風に答えた。

「へえ〜？ ただのオラクル兵・・・ねえ？」

「何か問題でも？」

「いいえ、べつにー？」

ジエイドは胡散臭げに笑って彼女の冷たい視線に怯むでもなく、
赤い目を細めてメガネをくいつと押し上げた。

「ただ、できればタルタロスでの譜術の詳細を教えてくださいなればう
れしいのですがねえ」

「お答えできません」

「そこをなんとか」

「お断りします」

「・・・残念です」

ティアはうんざりした様子で頬杖をついて、眠っているルークたちを見た。

チーグルの仔はルークに耳を鷲づかみにされてうなされているし、仔ライガはルークのお腹にもたれかかるように乗っかって、ルークをうならせている。

わずかに目を和らげてその様子を見ている彼女を見て、ジェイドはおやおやとからかい混じりの笑顔を浮かべた。

「子どもを見守るお母さんといったところですかね」

「え?? は? なにをどうしたらそんなことというかそんな年じゃなんでお母さんってええええ??」

「・・・なにもそんなに動揺しなくても」

そのまま、いいようにおちよくられているマスターをアーチャーは霊体化したままで、呆れた様子で見っていた。

丹精に整えられたテーブルには優美なティーカップが2つ。

すぐそばにはガラスのポットが置かれて、中にはたつぷりと紅茶が入れられて、白いテーブルクロスには紅色の影が映っている。

ぼんやりとあたりを見渡して、ルークは翡翠色の瞳を瞬かせた。窓の向こうは真っ白で吹き荒れる雪で先を見通すことができない。部屋は温かみのある配色で、家具は細々とした細工が美しく丁寧に手入れされているだろうことがうかがえた。

暖炉の火が明々と燃えて、火の粉がときどきパチンと音を響かせている。

さっきまで何をしていたのか、今どこにいるのか、前後の繋がりがつかめず啞然としたままで立ち尽くしていた。

「ちょっと!！」

ここはどこだろう。なんでこんなところにいるんだ??

「聞こえてる!? ねえ!！」

確か俺は……。旅をしていて??

「呼んでいるんだから返事しなさい!！」

ガツン!!!

足を思いつきり蹴っ飛ばされて思わず飛び上がり、涙目で後ろを振り向いた。

「なにしゃがる!！」

目の前に白い髪に赤い瞳の少女が心配げな表情でこちらを見ている。

ルークが振り向いたのを見るや表情を緩めて、「あー、よかった」と晴れやかな笑顔を浮かべた。

少女は彼の問いに答えるでもなく手をぎゅっと握って、テーブルの方へと引つ張っていった。

「こっちこっち！」

「おおい！」

引きずられてつまづきそうになり、ルークはムツとして彼女の手を打ち払ってにらみつけた。

「いったいなんなんだよお前は！ それにここは一体・・・」

「ひどーい。レディに向かってお前はないでしょ？」

・・・まあいいわ。久しぶりのお客さまだもの、少しぐらいの無礼は許してあげる」

少し気分を害したような顔をしたがすぐに笑顔を浮かべて、思いのほか強い力でルークの腕を引つ張った。

「ほら、せっかくお客様のために紅茶を入れたんだから早く椅子に座ってよ」

「お、おい」

あれよあれよという間に椅子に座らされてルークは落ち着きなく周りを見渡した。

少女は気にも留めず、ティーカップに紅茶を注ぎいれる。
ルークはティーカップを胡乱げに見つめて手に取るでもなく、優雅に紅茶を自分のカップに注ぎいれている様子を見ていた。
彼女はルークの目の前の席に座り、優雅な手つきで紅茶を口にしたら。ちろつとルークのほうに視線をやり、猫のようなとらえどころのない笑顔を浮かべる。

「飲まないの?? お客様のためにせっかく淹れたのに」

「お、おう」

おずおずとティーカップに手をやり、そつと口元にカップを引き寄せた。

水面がわずかに揺れて波紋を広げていく。

「んん???」

カップをじつと見て首を傾げる。

そして、もう一回口に含んでまた首を傾げる。

「なんか味しないぞ?」

「そう、よかった」

「よかったって・・・」

「そこまで侵食が進んでないってことね。最初は大変だったのよ? 危うく魂が侵食されるところだったんだから。英霊の記憶なんてただの毒なのに、親和性が高すぎて油断するとあつという間に読み込んでしまった」

「はあ？ なんだそりゃ」

「こつちの話」

「意味わかんねえよ」

胡乱な目で少女を見て、くいつとコップを傾けた。

味はしないが香りがとてもよいような気がする。なぜか不思議と暖かい気持ちになった。

つついそのまま飲み干してしまい、空のティーカップを少し困惑した表情で見っていた。

少女はやわらかい笑顔を浮かべ、空になったルークのカップに紅茶を注いだ。

「なあ」

ルークはしばらくの間、ぼーっと黙って紅茶を飲んでいたが、黙っていても何も解らないことに気がついて少女に声をかけた。

「一体ここはどこなんだ？」

「夢よ」

「はあ？？？」

「正確に言えば夢をこちら側に引き込んで再構築したものね。繋がりが緩いせいであるいるゴタゴタしたけどまあ許容範囲内かな。

まったく、あの子ったら何でこんないいかげんな状態で放置してるのかしら。どうせだからしっかりラインを繋げておけばいいのに。

ただでさえ魔力量が少ないんだから、取れるところはしつかり取っておきなさいってちゃんとやっておいたはずなんだけどなあ」

ルークは眉間にしわを寄せてにらみつけた。

「意味わかんねーよ。わかるように説明しろ」

「わからなくてもいいわ。あなたには関係のないことだもの」

「はあ？　なんだよそれ」

むすつと口を尖らせて、すねたように顔を背けた。

「まあまあ、すねないすねない」

ルークの態度に気を悪くするでもなく、少女はニコニコと笑ってルークの頭を優しくなでた。

「やめろってば。ったく、どいつもこいつも・・・」

鬱陶しげに少女の手を払い、ほんのりと頬を赤く染めて顔を背けているルークに彼女は口元に手を当ててくすくすと笑っていた。

窓の向こうを見れば、今もなお雪は激しく吹き付ける風が窓を揺らしている。

見たこともない光景に目を奪われて、無言でその光景を見た。

「なあ、ここっていつつもこんな感じなのか？」

「そうね、おおむねこんな感じよ。いっつも嵐ばかりで嫌になっちゃうわ。」

こんなところに閉じ込められて、外にも出られないんだからね、ねっ！なにか話してよ。外はどんなところだった？？」

「お前も軟禁されてるのか??」

ルークはなんともいえない表情をして、少女のきらきらとした顔を見た。

彼女は困った顔で首をひねって、うーんとうなった。

「うーん。まあ、結果的に言えばそうなるのかなあ」

「ふーん、お前も大変だな」

「まあ、自分で選んだ道だしね。あの子のおかげでここからでも外が見えるし、まあ意外と退屈しないよ」

「そんなもんなのか？よくわかんねーけど」

「そうそう」

彼の疑わしげな言葉に対し、彼女は朗らかな笑顔を浮かべてそんな風に答えた。

ルークはぎこちない語り口でこれまでの旅のことを話していた。

剣を見つけたこと、森の中で出会ったこと、街であったこと……。

少女は退屈する様子もなく楽しげに相づちを打って、先へ先へと

話を促す。

わいわいとにぎやかに言葉を交わして、ポットの中身はすでに空っぽで、おかわりを入れようかと少女は席を立った。

と、何かに気づいたようで窓の向こうをじっと見た。

「ん？　なんかあったのか？」

「そろそろ朝みたいね」

「え？　そうなのか??」

ルークはきよときよとと周りを見渡し首をかしげた。

「ほらほら、早く起きないと」

「え？　ええ？　そんなこと言ったって・・・」

うるたえて途方にくれたように少女を見た。

彼女はその様子を見ているだけで、何をするでもなく笑ってた。

「ふふっ、ほらよく耳を澄まして・・・」

「耳を澄まして??　わかんねーよ」

「早く目を覚まさない大変なこと・・・」

「大変なことって何だよ!!　なあ！」

「とつても大変なことになるよ」

「え？ えええ？？？ だから一体何が・・・ぶふあっ！」

目を覚ますと縞模様の塊が視界を占領していた。

口の中は毛だらけで、あごが外れそうなほど抉じ開けられてもぞもぞしている。それもそのはず、仔ライガが口の中に頭を突っ込もうとしている。

「ぼふあ！！ おいこら！ なにしゃがる！！」

仔ライガはあわてて逃げ出した。

その様子をすでに目を覚ましていたイオンが困った顔で見ている。

「おはようございます、ルーク」

「お、おう。おはよう」

どうにも気まずく、顔を背けてそつとあいさつをした。

「おやおや、ずいぶんと情熱的ですな」

「ルークおはよう。ほら、起きたら早く準備して。早くしないとおいでくよ」

「うっせ、わかったよ」

「ご主人様おはようございますのー」

「ああ」

しづしづと毛布をはねあげて、ぐいんと背伸びをした。

すでに野営の跡は綺麗に片付けられて、ジェイドはにぎやかに騒いでいる彼らを観察していた。

「ちっ」

ミュウを怒鳴りつけているルークをじっと見てあごをなでた。

「なんだよ」

ルークはじっくりと観察されてるのに気がついて、ムツとした表情でジェイドをにらんだ。

「いやあ、どうしましょうかねえ。不確定要素を取り込むのはちょっと避けたいのですが、戦力不足ですし警沢はいつてられませんかねえ」

「ど、どういことだよ」

「人を殺すのは怖い」

「っっ！」

「そうですよねっ？」

ルークはきつく唇をかみ締めてうつむいた。ミュウと仔ライガは

心配げに彼を見上げている。

「あなたがどうしてもというのであれば、私とティアが戦闘を勤めるという形でもかまいませんが、どうしますか??」

「・・・戦う」

「ルーク、無理しなくてもいいのよ?」

ティアは心配げに言葉をかけ、ジェイドも探るようにルークを見ていた。

「うるせー!!! 戦うったら戦うの!」

あちらこちらからの心配するような視線に苛立って叫んだ。
そして、ティアをギロツと見て指差し、怒り混じりに言葉をぶつける。

「だいたいな、前に言っただろ? 責任とって俺を屋敷に連れてく代わりに、俺がしっかり守ってやるってティアにもア・・・」

「あ?」

「あー!!! もう、この話はもうおしまい!!! とっとうと行くぞ!」

ルークは焦ったようにまくし立て、ぐんぐんと前を歩き出した。
チーグルの仔と仔ライガはその後ろをあわてて追いかけていった。
その姿をジェイドは興味深げに見ていたが、やれやれと肩をすくめて歩き出した。

ティアは途方にくれたようにその場で立ち尽くしていたが、イオンに促されて彼らの後についていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395y/>

深淵を引き裂く運命の剣

2011年12月16日00時54分発行